

流域の人々と歩む月刊誌

くまがわ春秋

2019

2

第35号

日本最古の恐竜化石



八代市植柳校区の「どんどう」(球磨川河川敷) ©平岡健三

月に願いを。

緋月

せんげつ

Japanese Traditional Rice Shochu
SENGETSU



緋月城（人吉城跡）にて撮影

緋月酒造株式会社
SENGETSU SHUZO CO., LTD.

〒868-0052 熊本県人吉市新町一番地 TEL 0966-22-3207

飲酒は20歳を過ぎてから。飲酒運転は法律で禁止されています。
妊娠中や授乳期の飲酒は、胎児・乳児の発達に悪影響を与えるおそれがあります。

<http://www.sengetsu.co.jp/>

雑誌 81779-02-9



4910817790291
00500

月刊 くまがわ春秋 第35号 2019年2月15日発行

企画：人吉球磨総合研究会 発行：人吉中央出版社
〒868-0015 熊本県人吉市下城本町1436-4の3号 <http://www.hitooyoshi.co.jp/> info@hitooyoshi.co.jp

定価 540円 本体 500円

最近のおもな出来事

- 1月17日(木)
▽奥球磨ごんぶりフェア・オープニングセレモニー(水上村保健センター)
- 1月19日(土)
▽人吉市図書館「図書館まつり」(人吉市カルチャーパレス)
- 1月20日(日)
▽第7回公認奥球磨ロードレース大会(水上村役場前発着)
- 1月22日(火)
▽ひとよし森のホール20周年記念「宮川彬良ニユイヤーコンサート」(同ホール)
- 1月26日(土)
▽人吉市「第65回文化財防火デー防火訓練」(願成寺)
▽「人吉の偉人に学ぶ会」発足記念シンポジウム
- ▽第49回球磨郡町村対抗青年団駅伝大会(あさぎり町東庁舎周辺周回コース)
- 2月1日(金)
▽「人吉球磨は、ひなまつり」(3月24日、郡市一帯)・オープニングセレモニー(JR人吉駅前広場)
- 2月8日(金)
▽ひとよし・くま市民劇場例会「加藤健一事務所・喝采」(人吉市カルチャーパレス)
- 2月9日(土)
▽第3回にしき産業フェスタ(10日、錦町役場前広場)

2月(第35号) 目次

- 巻頭言「鬼はそと」桑原史佳…2
- 柳人があじわう漱石俳句³⁵ いわさき楊子…13
- くまがわの神さん仏さん³⁰ 宮原信晃…14
- 記憶の落ち穂³⁴ 坂本福治…17
- 「あがつ段」³² 上杉芳野…18
- 建築みてある記³⁰「久多良木神社」森山 学…20
- 山に行こうよ! ¹⁶「六本杉山」…24
- 八代の塩田について 上村和代…26
- 明治維新150年―憲法を考える 岐部明廣…30
- 漢和字典は面白い¹⁸ 鶴上寛治…33
- おととわつとあすびその²⁵ 松舟博満…34
- 『民俗主義文学論』緒論⁷ 小山勝清…35
- 『民俗主義文学論・緒論』について 前山光則…40
- 民俗学者とダム―湯川洋司と五木村― 森明香…46

巻頭企画

- 日本最古の恐竜化石…3
- 「偉人に学ぶ」シンポジウム…6
- 「矢野派」について^下 大倉隆二…8

今月の一言

『文読む月日』(レフ・トルストイ編著 北御門二郎訳)より

われわれは、自分が肉体的に何者よりも弱いと感じるときでも、精神的には何者よりも強くありうる。

表紙写真

八代市植柳校区の「どんどや」



1月13日、八代市植柳校区の「どんどや」が球磨川河川敷で行われました。参加された方々は、今年の無病息災を祈り、家から持ってきた餅を焼いておいしくいただきました。

撮影/平岡健三(八代市)

もう一つの「明治維新」① 富永和信…50

砂時計―思い出るままに④ 小野武己…52

くまがわ狂句 村上鬼拳…53

小説・相良清兵衛¹⁴ 山口啓二…54

外来語から学ぶ英単語³⁵ 藤原 宏…59

ひろし…げっかん・ぎびょう…59

倉敷便り²⁶ 原田正史…60

労働力を考える 武井京子…63

お休みどころ通信④ 興野康也…64

方言を味わう³¹ 前田一洋…66

病氣と私² 瀬戸致行…68

那須良輔と北御門二郎² 村木正則…70

鶴鶴短歌会 一月詠草…73

字図で見る球磨の地名²⁵ 上村重次…74

エンブリー・ノート資料編① 大藤時彦…76

Facebook 華文俳句社②…81

いもご短歌会…82

くまがわ学習塾²⁶…83

前号「くまがわ学習塾²⁵の答え」…84

新聞の価格 白城松男…85

「郷土」37号を発刊…87



本誌の
取扱店舗

■清藤書店 ■ブックスミスミ ■明屋書店 (錦店・免田店・多良木駅店)
■道の駅さかもと ■TSUTAYA 八代松江店

日本最古の恐竜化石



八代市坂本町で見つかる

1億3300万年前の地層から



発見された肉食竜の肋骨の一部とみられる化石。博物館の入口付近に展示してある



肉食竜のイメージ図

御船町恐竜博物館によると、八代市坂本町（旧坂本村）の山林で、約1億3300万年前の白亜紀前期の

化石の長さ約8cm、幅4cm。骨の太さと形状などから、肉食竜（獣脚類）の肋骨の一部とみられる。体長は約8mから10m。

地層（川口層）から、同期の恐竜とみられる化石が見つかった。日本の最古級の恐竜の化石である。現在、同博物館で一般公開されているので見学した。

巻頭言

鬼はそと

2月に入り、いつもより早い春の花たちの開花のせいか、人吉球磨は一気に華やかになった。「人吉球磨は、ひなまつり」のオープニングイベントでは、人吉温泉旅館の女将の会「さくら会」の勢ぞろいの姿も球磨地方に春を告げる風物詩のひとつで、着物におそろいのピンクの法被姿の明るいイメージはさらなる華やきを添え、この地域の季節感の効果となる。

先日、わが保育園では1日早い豆まきを行った。子どもたちは思い思いのお面を作り、怖いけれども楽しみでもある「その日」を迎える。とても大きな赤鬼と青鬼が、子どもたちの悪い心を探して大きな棍棒を振り回しながら園中で大暴れをする。子どもたちは落花生を手に立ち向かうが、表情ひとつ変えないこわい鬼たちに右往左往しながら逃げている。福の神の登場で、鬼は改心してやさしくなり、みんなと仲良しになつて記念撮影に収まり、山へ帰つていくというストーリーとなる。子どもたちが落ち着き、落花生を食べ始めた頃、ある男の子が「あのね、おともだちがオニは本当はおらなっている。オニは先生がしよつて」と、真面目な顔をして話しかけてきた。一瞬考えて「そうね？ ねえ、あなたはオニはおらなと思うと？」と問いかけた。「おると思う」と即答。「うん、おるよね。今日はさつき山に帰つていったよ、怖かった？ もう大丈夫よ」と言つたら、安心した表情で子どもたちの中に入つていった。

社会には人間の姿をしたオニが潜んでいる。しかも近年陰湿なオニが増えている。周りの大人が思いやりのある言葉かけや行動で接することで、心ない言葉やいじめ、暴力で人を傷つけない、裏切らない大人へと成長してほしいと切に願う。

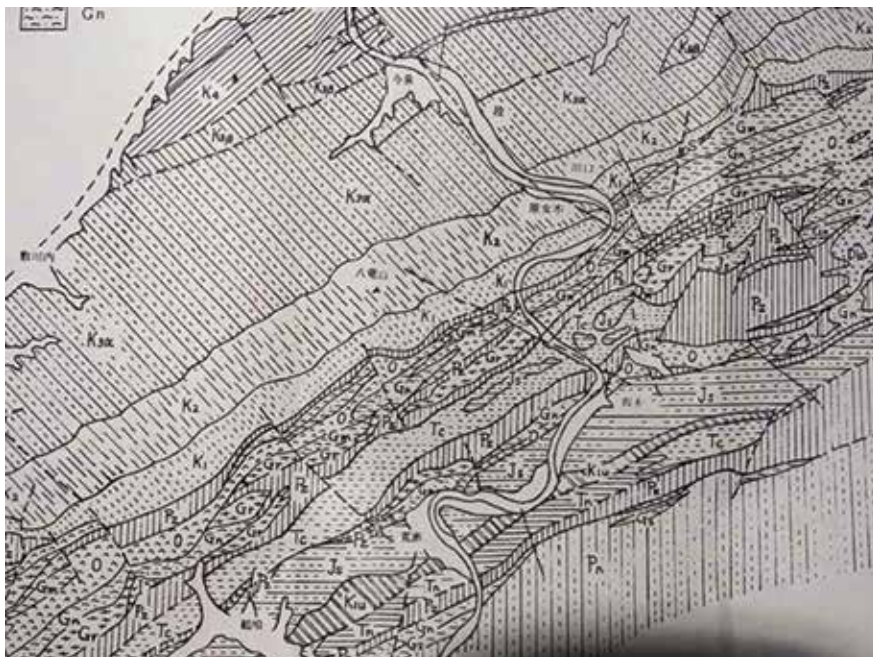
この子たちが二十歳になるころは新しい元号十四年。IT社会はますます発展しているのか。格安宇宙旅行のパンフレットを見ながら団体旅行を計画する時世となっているのか。人と人の繋がりは？ 戦争いや貧困のない平和な世界へと進むことができるだろうか。どんな世の中になっているのか楽しみだ。

四季折々の花が季節を間違えずに咲いて、人々の心に響いていれば、温かい心は失わないような気がするのだが、あなたはこう思う？

（桑原史佳）



赤の部分が川口層の場所（御船町恐竜博物館の解説図より）



「熊本地学巡検ガイドブック」(1970年)より。Kは白亜紀を指し、そのなかのK1が「川口層」(つる詳さん提供)



肉食竜の種類は確定していない。博物館の職員によると、写真のような姿かもしれないとのこと。下は肋骨部分



道の駅から見た坂本町の山々

「川口層」は芦北町田浦から八代市東陽町までの40kmに帯状に分布している。これまで同層から恐竜の化石が発見された例はないが、今回の

発見で同層に他にも恐竜の化石が存在する可能性がでてきた。同化石は、2014年10月、地質学・古生物学の男性研究者（合

志町在住）が調査中に発見し、恐竜博物館に鑑定を依頼していた。博物館の関係者によると化石発見以降、中高年層を中心に来館者が増えているという。

地域の先覚者の軌跡を紹介

人吉市で「偉人に学ぶ」シンポジウム



「偉人に学ぶ会」の発足記念シンポジウム（1月26日）

「打撃の神様」と呼ばれた元読売巨人軍の川上哲治氏をはじめとする、人吉出身の5人の先覚者の軌跡をたどる「人吉の偉人に学ぶ会」（松本晋一会長）の発足記念シンポジウムが1



10名の偉人を紹介している同会のパンフレットより

月26日、人吉市九日町の肥後銀行人吉支店3階ホールで開かれ、人吉出身の5人の先覚者の軌跡を学んだ。同会は人吉・球磨が生んだ近代日本の先覚者たちを「人物遺産」として捉え、これらを教育資源・観光資源として、次世代の子どもたちや地域の人々に発信し、活用してもらうことを目的として昨年5月に発足。

郷土の各種の遺産の中でも特に人物遺産を活用し、教育や観光、文化の発信源となる「郷土人物記念館」の設立を目指し、偉人の業績の掘り起こしや、場所を紹介する標柱の設置、資料作成などの活動を計画している。

同シンポジウムには約150人が出席。松本会長が



基調講演で川上哲治氏の素顔を紹介する川上修治さん

会の設立経緯や目的を説明し、偉人たちの存在を発信してほしい、とあいさつ。続いて川上氏の甥で、元済々黴高校校長の川上修治さんが基調講演。川上氏との写真を交えて紹介し、人吉球磨の人との出会いが川上哲治を育てたのだらうと述べた。

「知つとんね、こぎゃん人、あぎゃん人」と題した第2部では、郷土史家の前田一洋さんの進行で、川上氏と歯科医学者の一井正典、音楽家の犬

童球溪、日本初のパイロット・日野熊蔵、終戦工作に奔走した海軍少将・高木惣吉について、益田啓三さん・

本田絹子さん・花田淳さん・川越郁子さんらが、それぞれの熱い思いを語った。

人吉市では「人吉球磨は、ひなまつり」が1日、開幕。JR人吉駅前広場でオープニングセレモニーが行われた（写真）。3月24日までの期間中、郡

市内の施設100カ所以上で華やかなひな人形を展示。また、3月3日の「桃の節句」を中心に趣向を凝らした多彩な催事が展開される。



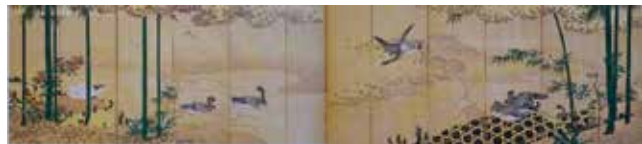
八代市では2月9日、本町・通町商店街の「城下町『やつしろ』のお雛祭り」と、日奈久温泉街の「ひなぐ雛祭り」が開幕。旧八代城主の松井家に江戸時代から受け継がれているひな飾りの会場巡りと「お雛ランチ・スイーツ」巡りの二つのスタンプラリーも行われる。日奈久温泉街では観光交流施設「日奈久ゆめ倉庫」や各旅館にひな飾りを展示。毎週土、日には手のりサイズのひな人形作り体験がある。

細川藩御用絵師「矢野派」について①

元 熊本県立美術館 副館長 大倉隆二



衛藤良行筆 山水図屏風 (県立美術館蔵)



衛藤良行筆 花鳥図屏風 (県立美術館蔵)

衛藤家初代衛藤良行（一七六一～一八二三）は通称源左衛門。号は蟠谷、叢玉亭、蘭叢軒など。藩画府根役。幼少より矢野雪叟に学び、よくその画風を習得し、天明六年（一七八六）藩絵師となる。寛政三年（一七九二）頃の『領内名勝図巻』の制作では、矢野家五代良勝と全十五巻のうち七巻半ずつを分担しているほど

で、早くからその画才が認められていたことがわかる。『肥後藩雪舟流画家傳』が「画風は温良緻密、近世拔群の妙手なり、尤も山水・花鳥・人物に長じ、物象に工みなり」と評しているように、江戸時代肥後画壇を代表する名手の一人である。師の雪叟よりもさらに雪舟風の山水図も遺した一方、『花鳥図屏風』（県立美術館蔵）のように斬新華麗な作



同 花鳥図屏風 部分

品もあるが、景物には矢野派特有の筆法が看取される。文政六年（一八二三）四月廿五日歿。六十三歳。

衛藤家二代衛藤勝夷（一七九〇～一八三二）は、もと山田慶蔵。号は蟠谷、蘭叢など。はじめ矢野良勝に学



衛藤勝夷筆 花鳥図 (県立美術館蔵)

び、勝夷と称す。のち衛藤良行に学びその養子となり、行高と改称。文化七年（一八一〇）稽古扶持として二人扶持、同十三年本扶持（三人扶持）に直され正式に絵師となった。画風は矢野派の筆法をよく示す山水図などのほか中国明清時代の院体画と折衷した花鳥画などもある。『肥後藩雪舟流画家傳』は、「画風温良、物象は工みにして尤も山水・花鳥に長ず、近世の能手なり」と評している。中国院体画の影響は、無類の絵画好きの殿様十代藩主斉茲が当時収集した中国の花鳥画などを研究したあとが認められ、その成果とみられる。天保二年（一八三二）正月廿日歿。四十二歳。

梶山家初代梶山良恭（？～一八三七）は、幼名良英、通称吉次郎。号は隣山、愛雲子、等温、桂谷など。はじめ衛藤良行に学び、のち矢野良勝に入門しその養子となり、矢野大貳とあらためた。あるとき法橋の印を刻しているのを見た良勝が、自分より先に法橋となったことを怒って離別したといひ、良恭は離別後上京し法橋に叙任し、一家を起したと伝えられる。画技は大変優れて



梶山良恭筆 池辺寺縁起絵巻 (池辺寺宝物管理委員会蔵)



梶山良恭筆 秋草図屏風 (県立美術館蔵)

いて、「矢野家六代」と目されていたとの逸話も残る。作風は文化元年(二八〇四)に描いた『池辺寺縁起絵巻』にみられるような矢野派の典型的な画風を見せる。一方『秋草図屏風』(県立美術館蔵)では大和絵の画題に都風の洗練されたデザイン感覚を見せるが、秋草や岩などの景物には伝統的な大和絵の柔らかさはなく、矢野派風を残している。天保八年(二八三七)一月廿三日歿。

杉谷雪樵(二八二八―一八九五)は、通称市太郎、敬時。

号は洞庭子。衛藤良行の弟子杉谷行直の子で、はじめ矢野家六代矢野良敬に学ぶ。中国の宋元画や日本の古画を研究して独自の様式を打ち立てた。安政三年(二八五六)に筆頭家老松井章之の参府のお供をして江戸に赴き、参府の道中ばかりでなく中山道まで足を延ばし、各地の名勝の写生をおこなった。これらは慶応二年(二八六六)頃に完成した『道中風景図巻』(全十七巻。松井文庫蔵)にまとめられた。明治維新では藩の禄を離れるが、明治二十年には再び旧主細川家の庇護を受けて上京し、宮中の御用を務めるなどの活躍をした。矢野派の掉尾を飾った絵師といえる。画

風は初め頃の典型的な矢野派風から、次第に四条派風の柔らかく余白の多い画風に傾斜していった感があるが、どこかに矢野派の痕跡を残している。東京では近代日本画草創期にあたり新派・旧派に分かれて論争があったが、旧派に属し、新派が主流となったためか忘れ去られたようである。

以上矢野派の主要絵師と作品をみてきたが、田代等甫、矢野家初代三郎兵衛吉重、二代吉安、三代茂安には強く雪舟流を主張したようにはみえない。しかし、四代雪叟から杉谷雪樵に至るまで雪舟流を標榜してきたのは何故か。絵師としての立場から見れば、三代茂安のと



杉谷雪樵筆 花鳥図 (県立美術館蔵)

きの狩野派への流儀替の一件が尾を引き、画聖雪舟に回歸することによって狩野派を超越しようと考えた、とみることもできよう。

さらに、これには社会的背景もあるのではあるまいか。雪叟による雪舟流回帰には、藩主細川重賢(二七二二―一七八五)や細川斉茲(二七五五?)及びそのブレーンとなった秋山玉山(二七〇二―一七六四)、片岡朱陵(二七一五―一七六八)、竹原玄路(二七二〇―一七九四)らが深く関わっていたと思われる。

細川重賢は藩政改革など為政者として高く評価されているが、博物学にも造詣が深く江戸博物学大名の先駆けとなった。その博物図譜として『重賢写生帳』(「昆虫

胥化図」「虫類生写」「群禽之図」「鳥類図譜」「錦繡聚」「聚芳図」等々)があり、自ら筆を執ったものも少なくないが、中には矢野良勝が描いたものも含まれ、矢野派との関わりが知られる。また、その肖像画は矢野雪叟の弟子でもあった竹原玄路が描いている。

細川齊茲は、無類の文人殿様であった宇土支藩主細川興文(号月翁。蘭の絵を得意とした)の三男で、本藩を継いだ。自らも絵を描いたが中国画の収集にも熱心で、細川家に伝

来した中国画はほとんど齊茲によって収集されたものである。この絵画マニアの齊茲は、矢野良勝及び衛藤良行らに寛政三年(二七九二)、大作『領内名勝図巻』の制作を命じた。矢野派に全幅の信頼を寄せていたことが察せられる。

秋山玉山は儒者で、藩主重賢に藩校時習館建設を建議し、その初代教授となった人物で重賢の信任も厚かった。かたわら書画も嗜んだ。

片岡朱陵は熊本藩に仕えた儒者で、京都で徂徠学を修めた。帰藩後は、堀平太左衛門勝名をはじめ多くの人に実用を宗とする儒学を教え藩主重賢の侍講となった。また、門下からは大奉行堀平太左衛門、竹原勘十郎玄路ら宝暦の改革の功労者らが出た。一方『肥後藩雪舟流画家傳』は、朱陵は矢野三代茂安に学んだことが記され、雪叟と同門であった。

竹原玄路は藩主重賢に側用人として仕え、「宝暦の改革」の功労者の一人となった。絵を矢野家四代雪叟に学

んだと伝えその画風をよく伝える作品もあるが、通常は専門絵師が描くような重賢の肖像画を描いたことが特筆される。

こうした藩首脳部のバックアップがあつて矢野派は独自の画風を自由に展開できたと思われるが、やや古風な雪舟流への回帰及びそれを守り通した背景には、儒学的な思想の反映があつたのかもしれない。事実、江戸時代の熊本には浮世絵などの流派はついに興らず、武士だけでなく町人まで矢野派の絵を鑑賞してきた。

以上、江戸時代肥後画壇の主流となった矢野派を概観した。より詳しくは初めの方に提示した「開館二十周年記念・第十九回熊本美術展『細川藩御用絵師・矢野派』雪舟流画風の再興と継承」図録を、また熊本の絵画史における矢野派の位置などについては『肥後の書画名品撰』(平成四年＝一九九二＝十月 株式会社鶴屋百貨店刊)を是非参照したい。なお、図版はすべて両書よりの転載である。

【おくら・りゅうじ／玉名市】

―― 漱石が住んだ家 ――

漱石は在熊4年3カ月間に6軒の借家に住んだ。いまも3軒の家が現存している。

①光琳寺の家(熊本市下通町二〇三番地)

熊本で結婚して鏡子夫人と住み始めた家。

すゞしさや裏は鉦うつ光琳寺(漱石29歳)

光琳という音が
すゞしさをかもしだ
している。今や光琳
寺通りの標柱はチラ
シや看板に囲まれて
いる(写真)。



②合羽町の家(合羽町二三七番地)

名月や十三円の家に住む(漱石29歳)

家賃十三円が高いと思つたらしい。名月の雅と家賃の俗の取り合わせがいかに漱石らしい。

③大江の家(大江村四百二番地)

傘を菊にさしたり新屋敷(漱石30歳)

この家から出発した小天温泉への旅が小説「草枕」の舞台となった。現在は水前寺公園ウラに移築されて一般に公開されている。

④井川淵の家(井川淵八番地) 白川のほとりにあつた。

⑤内坪井の家(内坪井町七十八番地)

一番長く(1年8カ月)住んだ。現在「夏目漱石内坪井旧居」として熊本市によって保存公開されている(工事休館中)。第1子の筆子はこの家で生まれた。

安々と海鼠の如き子を生めり(漱石32歳)

⑥北千反畑の家(北千反畑七十八番地)

ロンドン留学のため上京するまでの最後の家。

菜の花の隣もありて竹の垣(漱石33歳)

家は現存しており、保存活動が始まっている。

どこに住んでも回覧板にはさまれる

コンビニへ固定資産税納入す

【いわさき楊子／川柳と俳句の愛好家、熊本市在住】

柳人があじわう漱石俳句

―― ③ ―

いわさき楊子



くまがわの神さん仏さん ③〇

痔の神さま、のどの神さま

宮原信晃

「鬼は外、福は内！」と近くの
家から聞こえそうな節分の朝であ
る。人吉市浪床町の線路の側に立つ
た。

鹿児島方面から上りの列車が来
たので手元のスマホで「いさぶろう
しんべい号」の列車の動画を撮った。
列車が通過して遮断機は上がった

痔の神さま（浪床秋葉宮）の鳥居とお堂

が気になる看板
に目を止めた。
「痔の神さま、
のどの神さま」
こらあゝゝ
行ってみらんば
ん、と正面にあ
る「痔の神さま」
に行ってみた。
参道の入り口

には木製の赤い鳥居があり、その
鳥居の奥は墓所なのである。

その横にお堂があつて「痔の神
火の神」と紫の垂れ幕に書かれて
あつた。

お堂に上がって一礼をしつつ賽銭
箱に小銭を入れて拝礼。

あれ？ なんまんだぶつ？と迷つ
た。

いやいや、ここは神さまの場所。
柏手も後から打ってお詣りした。

車の通る道を散歩中のご婦人が

通りかかられたので、いくつか聞い
てみた。

「球磨工業の生徒達があの鳥居を
建てたんですよ」と指を指して教え
てもらう。「あらゝ鳥居の頭も色の
剥けて来たごたる」とおっしゃった

ので、「こんくらい剥けてきました
ね」と私の帽子を取って頭上を差し
出すと初対面なのに大きな声と笑
顔で喜んで頂いた。
「この線路沿いの道を歩いていっ
て、少し坂になっている途中に、の

どの神さんのおんなつですよ。先の
道はじゆく田んぼになつとつで用心
してくださいね」と次なる、のどの
神さまの場所も聞いた。

「じゆく田んぼ」とはどんな田ん
ぼかと楽しみに歩いて向かう。線路

の際の道ではあるが、確かに
「じゆく田んぼ」の道であつ
た。足がじゆくじゆくと水気
のある道で、一ヶ所はコンク
リートが割れて道が無い。一
度下の段に降りてそれから進
む。イノシシの仕掛けがあり
そうな、そんな道でもあつた。

「のどの神さま」と書かれ
た看板の奥に祠（ほら）を取り囲む
ような石積みがあつたが、残
念ながら祠の姿は無かつた。
手を合わせてお詣りして



お堂にある痔の神・のどの神の垂れ幕



京都の秋葉神社との関係などが記してある坂本福治先生の筆による説明板

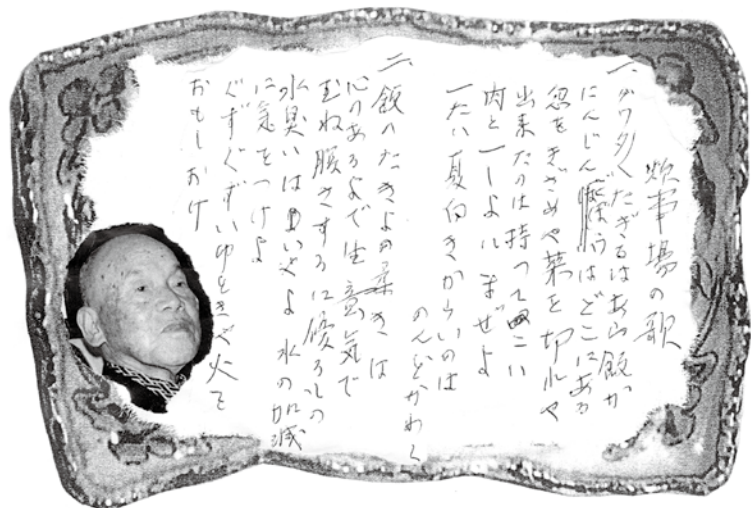


踏切にある看板

記憶の落し穂

その ③④

絵と文／坂本福治



新幹線での出会い

となりは相当年配の男性。金鶏勲章のバッチをつけている。元軍人だろう。二、三日前、誕生日だったとのこと。何と、私の誕生日と同じ日だった。たちまち意気投合。しかも、私は四十四歳、金鶏氏は倍の八十八歳で二人旅なのだ。話が進んで又びっくり。私の幼少期によく遊んだ平壤の瑞気山という丘で、部下の訓練をしていた小隊長だったのだ。六十年ぶりに思い出したと言って、部下のために作った歌を手帳に書きはじめた。眼鏡いらずにも驚いた。その後、永年賞状をかわしたが、ある日、本人が私のことを思い出せないとのハガキが家族から届いた。すぐに車内での出会いを書き、送った。その後何年もたって、川内市での河童大会に行く途中、覚えのある地名に気づき、車を止めて家を探したら、近くだった。金鶏氏の息子嫁が一人いて、大島紬を織っていた。土産に大島紬の財布をもらった。今年の正月前の荷物の大整理をしていたとき、それが出てきた。

【さかもと・ふくじ／画家、人吉市】



看板の奥に祠を取り囲むような石積みがあった

あれから、尻も、のども調子が良い気がする。場所は人吉城址の横を南へ進み田町の坂を途中から左の急坂に入り、そこからグリーンと登っていき踏切から左へ入って二つ目の踏切に看板あり。看板も説明書きも画家坂本福治先生の作で、先生独自の書の温かみを感じつつ、二ヶ所の神さまと御対面下さいませ。そらあゝ効くる

ばあ〜い！

【みやはら・のぶあき／F Bお地蔵さん調査隊代表・人吉おおくま座の会事務局】



辺りをキョロキョロ。すぐそこは介護老人保健施設・御薬園の建物があった。ここから来れば早かった！と独り言。新春の楽しいゆく田

んぼの道を歩き、途中の菜の花や猪か鹿かと思われる足跡をスマホで写して帰った。



上杉芳野の「あがつ段」③2

お前も家族の一員だ



元気のないチャミ子

我が家の愛犬チャミ子は女（雌）だてらに玄関の門柱の上に飛び上がり、沖縄のシーサー気取りで座るという特技がある。

昨年が戌（犬）年だったので道行く人が珍しがって写真を撮る人もいた。よく家に来る人や車は覚えていて吠えないが、知らない人

や車にはもの凄いで吠え続ける。

そんなチャミ子が昨年の12月始め頃から食欲がなくなり、元気もなく、吠えなくなつた。

娘の夢都美が「お父さん、動物病院のお金は私が半分出すで病院に連れて行こう」といつてくれて12月18日に錦町の動物病院に行った。

「熱もあるし風邪だろう」とのこと薬を飲ませたが変わらない。その内に出血し始め、女の子だから生理ぐらいに思っていた。

25日再度、病院に連れて行き「子宮蓄膿症」と

の診断。その日の夕方に手術が行われた。

淋しがっているだろうと思ひ、娘と二人で次の日に面会に行つたらオリの中に入っている。首にはピンク色の浮き袋みたいな首輪がはめられ、傷口を舐めない様にしてあった。

先生が優しい声で「チャミ子ちゃん面会よ」言われ、「チャミ子」と私達が呼ぶと解つた様で、ワンワンじゃなくて、クインクインと何か訴えている様な、目も何か真剣に言葉を発している。

「痛かつたよ、淋しかつたよ、帰りたいよ、早くこ

こから出して連れて帰つて」と言っている様に思えた。

手術後の説明をされた時、1kg程の蓄膿を切り開いて見せて下さった。パンパンに腫れた中から出て来る茶褐色の血、異様な匂いに「ウツ」と口を塞いだ。「重かつたろう、苦しかつたらう」とチャミ子を自分の子供の様に可哀想に思った。



手術後面会に行った時のチャミ子。傷口をなめないように、浮き輪のようなものを首にはめてあった



私に甘えるチャミ子。子守唄を歌ってあげると静かに眠る

唄いながら目を閉じる。
私が歌いおわると、パツと目を開ける。
今では元通り元気に走りまわり門柱に座って吠



元気になったチャミ子

髪を引かれる思いで帰つた。

退院後は玄関に箱を置き、娘が買ってきた犬用の湯たんぽを入れて毛布を掛けた。

クリスマスのサンタの服、お正月の獅子舞の服を着せてまるで人間の様だ。

寝る時は五木の子守唄を歌つてやると、自分も一緒になつてウーンウーンと

えている。

今まで当たり前前思っていたが、お前の声が聞こえなかつた時は淋しかったよ。

保険がきかないから3日間の支払いにはビックリしたが、お金じゃない。

いつも家族を守ってくれてありがとう。

お前も家族の一員だ。改めて感謝した。

【うえずぎ・よしの／ボランティア観光バスガール、あさぎ町上】

久多良木神社をあるく

森山 学

八代市坂本町の百済来^{くだらぎしも}川、球磨川の支流である百済来川に沿って久多良木神社の境内がある。旧久多良木小学校の校地に隣接し、陣内川が百済木川に合流する地点である。近くには本紙の第二五号でも紹介した百済来地蔵堂がある。

久多良木神社を訪れるには、JR八代駅から車で約三〇分ほどである。

御祭神は健甕龍命など阿蘇十二神である。創建は永享元年（二四二九）。八代市内の他の社寺と同じように、やはり天正年間

写真① 一の鳥居

（二五七三〜九二）に一度、社殿が焼失している。「坂本村史」によれば、このとき、当時の神主・治部大夫が、御神体を瀬戸石山の仮宮に遷座したとのことである。その後、

明暦元年（二六五五）にもとの境内に再建を果たしたようである。

それでは、樹々が茂る境内へと歩をすすめよう。この樹々は八代市指定天然記念物の「久多良木神社の森」である。エノキ・杉・イチヨウからなり、創建当初に形成されたものと考えられている。

境内は南西方向を向いている。まずその入口には、昭和十五年（二九四〇）の一の鳥居が建ち、境界には玉垣がめぐっている（写真①）。幟立石は大正、昭和初期のものが立てられている。左手には山の神の祠がある。

参道はまっすぐに進み、見るからに歴史ある二の鳥居へ至る（写真②）。こちらは宝暦十二年（二七六二）の奉納である。やはり玉垣がめぐり、

二重に神域が形成されている。この右手に六基の石灯籠群があり、これらは寛文十二年（二六七二）から天保六年（二八三五）までに奉納されたものである（写真③）。

参道正面に鉄筋コンクリート造の拝殿、その右手に渡り廊下で結ばれた社務所がある。拝殿の奥の幣殿も含め、昭和三九年（二九六四）に建設されたものである。これ以前の

拝殿、幣殿は、嘉永七年（二八五四）に建設されたものであった。

さてその奥に、いよいよ本殿である（写真④）。本殿は反りがある切妻造の屋根で、正面の屋根の方が長



写真② 二の鳥居と拝殿



写真③ 石灯籠群



写真④ 本殿

く伸びており、「流造」とよばれる形式である。柱間の数をかぞえると

幅が三間、奥行が二間の大きさであり、「三間社流造」とよぶ。

屋根は銅板葺きで、勝

男木、置千木が棟の上に

乗る。「勝男木」はかつお

節のようなかたちの部材

で、「置千木」は×のかた

ちをしている。昭和三七年

(一九六二)に茅葺きを

銅板に葺き替えているが、

それ以前には置千木では

なく、代わりに鬼板(鬼

瓦のようなもの)が乗せられていたようである。拝殿内には当時のその大きな鬼板が保管されている。

正面の屋根が長く伸びているのは、その下で参拝するためである。

これを「向拝」(写真⑤)とよぶが、

この向拝の柱のうち、両端の二本の

柱には獅子鼻、象鼻とよばれる彫

物がつく。また建物本体とは、「海

老虹梁」とよばれる、海老の背中

のようにカーブを描く梁で結ばれる。

垂木に沿って設けられる「手挟」は

雲文の彫物である。こうし

た部材は、現在、ペンキ塗

装がされている。

正面、側面には縁側が

まわる。縁側の疑宝珠勾欄

もペンキ塗装されている。

その床下に火灯曲線を描く



写真⑤ 向拝



写真⑥ 本殿の縁側下

板がある(写真⑥)。

では側面にまわってみよう。屋根

の下、三角形の壁に装飾が充実して

いる。「妻飾り」とよばれる部分で

ある(写真⑦)。久多良木神社

では、左右どちらの妻飾りも同

じテーマである。雲文の虹梁の

上に二つの大きな墓股(カエル

が足を広げたようなかたちの部

材で束の役割をする)が乗る。

その内股は火灯曲線できり抜か

れ、阿蘇神社の社紋に通じる「丸

に違い鷹の羽紋」が描かれる。

二つの墓股のあいだには、板

に直接、松が描かれている。他

の部材がペンキ塗りであるのに

対し、この板絵は当初からの彩

色である。

その上、最頂部には、屋根

と虹梁で囲まれた三角形の部分

に、三角形のかたちをした彫物

がすっぽりと納められている。彫物

は、波間を泳ぐ龍である。彫物の

上に大斗があり、棟木を支えている

ことから、この彫物自体が束の役割

をしていることがわかる。

板絵や三角形の彫物の束といった

ところが、久多良木神社特有の特

徴と言えよう。

また本殿の右隣には、菅原道真、

沖津彦、沖津姫を祀る末社、吉田

神社がある。吉田神社は反りのな

い切妻造の屋根で、平入であること

から、疑似神明造ともよべる。こち

らは本殿の屋根を葺き替えた同年、

昭和三七年(一九六二)の建築であ

写真⑦ 妻飾り

【もりやま・まなぶ／高専教員、一級建築士、八代市】



清掃登山に参加した27名の皆さん

て記念写真を撮る。ゴミは思ったより沢山あった。それを分別して

袋に詰め替え、帰りに休日の五木村役場に持って行った。

参加された方々、本当にご苦労様でした。

【段村善昭】

吉村秋雄さん（69歳）
10年かけて市房登頂
200回達成



12月9日、一緒になった登山者に祝福してもらった吉村さん（中央）

回数を重ねる度に余裕もでき、まわりの景色を見ながら登れるようになりました。また市房山の四季の変化を楽しみながら登れたこと、登山者の方と話ができたことも続けられる励みになりました。

これからも身体が続く限り登り続けたいと思います。

【吉村秋雄】



ゴミ袋を手に登山する参加者

県連清掃登山に参加

今年の県連清掃登山は、人吉球磨ハイキングクラブが担当することになりました。どの山にするか、思いを巡らせてみましたが、ごみの目に付く山が思い

当たりません。

そんな時、8月の例会で登った六本杉山が心にとまりました。そこは端海野キャンプ場の自然探勝路のようです。貴重な植物が多いのか、林の中を歩くと名札を付けられた木がいっぱいあります。ただ、その古い名札が朽ち落ちて無惨に散らばっているのがゴミのように見えました。

会長と二人で五木村役場を訪問して、清掃登山のことを話すと「有難い事です」と、ゴミ袋を15枚頂いた。

当日、キャンプ場を10時にスタートして山に入る。照葉樹が多く、自然の林のようである。徒

歩道が書かれた地図は用意できなかったが要所に案内板があるの不安は感じなかった。深い落葉の下に朽ちた名札を見つけては掘り出す。道を少し外れた所にはビールやコーヒの空き缶があった。途中でレジ袋がごみで一杯になる。およそ50分で頂上に着いた。

林の中の十畳位の広場の真ん中に六本杉山の標札が立っていた。皆が揃ったところで集合写真を撮る。カメラを持っている人が代わるがわるに撮るので笑顔が引きつった。11時過ぎ、下山を始める。冬枯れの梢に、僅かに残ったモミジを見つけては歓声が上がる。純白のサザンカの花が印象に残った。

12時過ぎにキャンプ場に到着した。最後に今日の成果を前にし

八代の塩田について

上村 和代

数年前、八代市内を通っていたとき、ある地藏堂を見つけました。その隣には「塩屋耕地整理之碑」と彫られた立派な石碑がありました。スマホの地図で確認するとそこは八代市新地町。道向かいには塩屋町です。「ああ、この辺りは昔は塩田だったのか」と思ったものです。

私の出身は香川県です。いまではうどん県と言った方が通りのよい県ですが、かつては「瀬戸内十州塩田」と呼ばれた日本を代表する製塩地の一つでした。母校の小学校校歌は「日本一の製塩地」ではじまるほどで、授業では塩田についてもほかの

地方よりは多少詳しく習っているようです。そんなところから塩屋という地名が塩田由来であることも記憶にあつたのでした。

昨年の秋、本誌第31号（2018年10月号）掲載の上村雄一氏の「塩の話」を読んだとき、先の地藏堂と石碑を思い出しました。そして、八代の塩田について、もう少し詳しく知りたいと思いました。以下は、私が八代の製塩についておおまかに調べた結果です。まだまだ調べの足りない部分も多く、誤った解釈もあると思いますが、今のところわかったことをまとめておきます。

熊本県内のおもな製塩地と特徴

熊本県内の製塩地を大まかにまとめると次のようになります。

腹赤地区―現在の玉名市長洲周辺（長洲、清源寺、鍋、上沖洲、下沖洲）。享保5年（1720）には塩の煎熬（せんちゆう）に石炭炊きを行っていたという記録があり、九州内でも早くから石炭炊きを取り入れていた。

不知火・三角地区―現在の宇城市小川町周辺や戸馳島など。塩田はもとより各地から製塩土器（塩水を煮詰めて塩を作った土器）が出土する古墳時代からの製塩地。

天草各地―天草市有明町大浦、亀場町亀川、五和町通詞島、上天草市大矢野維和島など。不知火地



塩屋耕地整理記念碑と地藏堂

区と同じく製塩土器が出土する。昭和29年の全国塩田地図に千束蔵々島（維和島の別名）の島崎塩田の名が残る。

芦北・水俣地区―天正15年（1587）深水三河守が津奈木塩田を創設したと伝わる。水俣では寛文7年（1667）の塩浜造成から本格的な塩田がはじまった。明治時代には70%が佐賀や島原へ送られそうめん作りに使われた。

八代・鏡地区―八代塩田は、元和8年（1622）八代城代加藤右馬允正方が城下西部（現在の塩屋町）に塩浜を拓いたのがはじまりと伝わる。文政四年（1821）

の七百町新地開拓の折、一部の農耕に適さない土地に塩浜を拓いたのが文政塩田（現在の鏡町塩浜）のはじまり。明治30年代には、鏡地区の塩田は県内最大規模にまで拡大していた。

「日本製塩技術史の研究」によると、熊本藩の塩の生産状況は、いろいろな製法を合わせると幕末の頃には105石ほどあり、自給分は十分で藩の外への販売も可能だったとあります。しかし、明治三十八年（1905）の専売制度施行以降、熊本の塩田は徐々にすたれ、昭和初期には統計上はゼロとなりました。熊本の塩業がこれだけ極端に減少したのは、生産性の低い塩田を廃止させた国の政策によるものようです。

熊本に限らず有明海・八代海沿

岸は、干満差の大きい遠浅の海岸線をもつことから、塩浜や塩田が作りやすかったようです。そのため家族や集落単位で主に自分たちが使うための塩を作る小規模な塩田が多く、商業向けの均一品質な塩の大量生産に結びつかなかったことも、塩業衰退の二因の一つです。

八代塩屋と鏡塩屋の

違いについて

「塩の話」の最後にあった、八代塩屋と鏡塩屋の製塩方法の違いについて考えてみました。

塩づくりには、大きく分けて二つの部門があります。

海水を天日に当てたり風にさらして水分を飛ばし、塩分濃度の濃い塩水（鹹水^{かんすい}）にする「採鹹部門^{さいかんぶもん}」。塩

田作業がこれにあたる。
鹹水を煮詰めて塩の結晶を取り出す「煎熬部門^{せんごうぶもん}」。「塩焼き」ともいわれる。

江戸時代に描かれた絵画や明治時代の記録から、八代・鏡塩田ともに入浜式塩田だったと思われます。違いがあったとすれば煎熬部門でしょう。

煎熬には大量の燃料が必要となります。江戸時代には、松・杉・ヒノキなどの小枝や薪を使うことが一般的でそれらはまとめて「松葉」と呼ばれ、供給地にとっては重要な産業でした。明治末期になると国内のほとんどの製塩地で火力が強く価格の安い石炭が使われるようになりましたが、松葉の供給地との経済的になつ

ながりが強い地域では石炭導入に反発があったり、藩が禁じていたところもあったそうです。また、石炭で炊いた塩は味が劣るといったイメージを持つ人も少なからずいたようで、明治末期になっても松葉炊きの塩を指定してくる醤油醸造所があったという記録もあり、石炭炊きより松葉炊きの塩が上等とされていたようです。

角川地名大辞典の「塩浜村」の項によると、製塩法を改良した天保七年（1836）頃から、塩田を廃業する明治末期ごろまで鏡塩田は「和合塩田」と呼ばれたとあります。

和合とは、仲良く協同でことにあたることです。鏡塩屋では、いろいろな製塩地の技術を取り入れていたことからこのような呼び名がついた

と思われます。製塩について先進地域であった「瀬戸内十州」では、塩

の価格維持のため、今でいうカルテルのような取り決めを結び、年間の作業日数や生産量の調整が行われていました。そのため、浜子と呼ばれる製塩賃労働者は地元塩田が休業中に遠くの塩田に出稼ぎに行くこともあったそうです。高い技術を持った人の中にはスカウトされる人や、そのまま移住する人もいたそうなので、八代にもそういった人たちが移り住んでいたのかもしれない。

鏡塩屋が天保時代に製塩法を改良し「和合塩田」となったのは生産性を高め、商業用の塩づくりを行っていたのだと思います。一方の八代塩屋は、昔ながらの自給用の塩を作っていたということではないかと思

ます。

八代市塩屋町には塩釜神社があります。その名の通り製塩をつかさどる神様「塩土老翁^{しおつちらお}」を祀ります。境内に立つ由来書きによると、城代家老加藤右馬允正方が元和8年（1622）の八代城竣工後、塩浜を開墾した際に同神社を建立し、「製塩のみならず航海安全や漁業・安産の神として地元民の信仰を集めてきた」とあります。これは、製塩が生活の一部だったことの現れかもしれません。

いまは推測するしかありませんが、今後もう少し詳しく調べてみるつもりです。

この原稿を書いていたとき、八代市が日本遺産に石橋などの石造り文

化を申請したというニュースを聞きました。「種山石工」の手による眼鏡橋群のほか八代城の石垣や干拓堤防の樋門など市内28の文化財が構成要素に取り上げられるそうです。石橋は、もともと好きで調べていました。干拓の歴史はそのまま塩田の歴史でもあります。樋門についても興味をもったところで、両方がつながると思いますでした。これを機会に石橋と塩田について、勉強したいと思いました。

参考資料

- ・角川地名大辞典 43 熊本県
- ・日本製塩技術史の研究 廣山堯道 雄山閣

明治維新150年

憲法を考える

外山胃腸病院院長 岐部明廣

平成30年は、明治維新150年ということで、明治維新が脚光をあびた。薩摩の西郷隆盛も脚光を浴びた。私は小説家の司馬遼太郎、海音寺潮五郎がとても好きなので、明治維新に関わる小説は沢山読んだ。「翔ぶが如く」「竜馬がゆく」「西郷隆盛」「江戸開城」「花神」「胡蝶の夢」「歳月」「最後の将軍」「風雲」「南風薩摩歌」「有馬新七」「勝海舟」「椎の夏木立」「島津騒動」「父祖の道」「人切り新兵衛」「残月の賦」などなど。特に司馬遼太郎の影響で、彼の歴史感が私の歴史感になっているのは、我ながら驚いている。彼は明治憲法、すなわち大日本帝国憲法の問題点についても論じている。明治憲法の基本は、「五か条の御誓文」であるはずであった。

しかし、長州の伊藤博文、山縣有朋らが富国強兵を急ぐあまり、明治憲法には大きな致命傷があった。当時の状況を考えれば、富国強兵を急ぐのは欧米列強の侵略を防ぐうえで致し方なかったが、取り返しのつかない大きな致命傷が残った。それにしても、明治憲法ができる前に西郷隆盛、木戸孝允、大久保利通、江藤新平、横井小楠が亡くなったのは惜しい。仮に彼らが生きていたら、明治憲法には大きな致命傷が残らなかったかもしれない、などと馬鹿な想像までしてみる。

みなさんは、「五か条の御誓文」を読んだことがあるでしょうか？

「五か条の御誓文」は越前福井藩の由利公正が起草し

たのを、土佐の福岡孝弟、長州の木戸孝允が修正をしたという。

下記の五力条

- (1) 万機公論
- (2) 上下心を一つにして経綸をおこなう
- (3) 庶民を倦まざらしめん
- (4) 陋習を破る
- (5) 智識を世界に求める

昭和天皇も、

「日本国憲法はアメリカから押し付けられた憲法だという人もおられるが、その精神は明治維新の五か条の御誓文であられる」

と明言された。

確かに「五か条の御誓文」には味がある。

(1)の「万機公論」は小泉純一郎元首相がしばしば口にした言葉だ。

わかりやすく言えば、「大切なことは、みんなで決

まよう」という意味だ。

(3)は由利公正の言葉のままだが、残念ながら土佐の福岡孝弟らによつて訂正され、更に(1)から(3)に下げられた。

「庶民を倦まざらしめん」

明治初期の言葉は解りにくい。

倦怠感の「倦む」は、「きつい」の意味。「庶民をきつがらせてはいけない」という意味らしい。

これは由利公正によれば、「庶民生活の充足」を言うらしい。今の「基本的人権」である。

由利公正に「基本的人権」の精神を教えたのは、肥後藩出身で、彼の恩師・横井小楠である。小楠の進歩的思想はすばらしい。

(2)の経綸も横井小楠の好きな言葉だ。

我々には、なじみのない言葉だが、郷土の偉人・徳富蘇峰の「近世日本国民史」にも経綸という言葉が、100回ほど使われている。

明治2年に暗殺された横井小楠は、新年の明治維新151年が、没後150周年にあたる。

漢和字典は面白い

18
鶴上寛治

賃

この字を見
て、真つ先に頭
に浮かぶのは「賃
金チンギン」だ。
働いて（いいか

えれば自分の体と頭をすりへらし
て）手に入れたお金。——それ
が自分と家族の生活を支える唯一
の収入だから忘れることはない。
誰がどういふ基準でその額を決め
るのか？ すべてを平等に正しく
見ていくくださる神様が決めるの
か？ 働くものの希望はどうなる
のか。労働組合の存在意義はそこ
にある。基本的人権として保障さ
れてきた歴史（幾多の犠牲者の屍
を乗り越えて）の産物であること
をしっかりと見つめよう。

富

字形は「家に物が豊かに備わるさま」で「とむ
とませる・とみ」で、経済的にゆたかであること。
昔は富士山のこと「不尽の山」と書いている（「万
葉集」や「更級日記」など）。〈ふじ〉は不死に通
じるといので、旧江戸の町には富士見（不死身）
町とか富士見坂、などという地名をつけたところがたくさんある。
実際には富士山は見えないが、一種の〈おまじない〉として、この
町名をつけたらしい。「武士道とは、死ぬことと見つけたり」（「葉隠」）
などと虚勢を張っていたが、実のところ武士たちも死にたくはなかつ
たらしい。

知

「矢を添えていのり、神意をしる」ことから一
般的に「知る」の意となる。知行とは何ぞや？
江戸時代、武士は農工商の民に対して「よろし
むべし、知らしむべからず」という方針で臨んだ
とか。政治についても何事についても、「国民が知
ろうとする権利」を制限しようという動きには要注意。何も一党
独裁で基本的人権抑圧の習体制の中国のことだけを言っているの
はない。かつてのナチスの手法に学べ、といったのは日本の麻生副
総理だ。

【つるかみ・かんじ／人吉市】

因みに、明治維新という言葉をはじめて使ったのは、
徳富蘇峰らしい。

横井小楠は、徳富蘇峰の叔父にあたる。

そして、私の好きな小説家の司馬遼太郎、海音寺潮
五郎の小説の参考書（参考文献）が徳富蘇峰の名著「近
世日本国民史」なのである。

だから、私の一番尊敬する人は、徳富蘇峰となる。

(4)の陋習とは、鎖国、幕藩体制（封建主義）のことだ。

このたび、長州出身の安倍晋三首相が、首相に三選さ
れた。彼の「晋」は長州の伊藤博文、山縣有朋の上司・
高杉晋作の「晋」だそう。たぶん、安倍晋三首相も
明治維新150年を意識しただろう。明治維新50年、
100年の首相が、それぞれ長州出身の寺内正毅、佐
藤栄作なども運命を感じる。

安倍晋三首相は、日本国憲法の不備を訂正したい意
欲がある。それが、彼の念願でもある。

そこで、明治維新150年を契機に「五か条の御誓
文」、大日本帝国憲法、日本国憲法を今一度、オサライ
するのもイイカモね。

否、日本国民の義務かもね。

忙しいひとは「五か条の御誓文」だけでも読んでくだ
さい。

写真は福岡県福岡市にある横井小楠と由利公正の銅
像です。

【きべ・あきひろ／人吉市】



コオジと やじろべえ

木の実んつこけぎやうつたて
ば、いっだんあすぶとんううひ
なった。

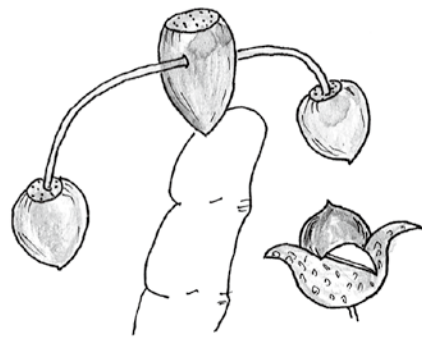
そぎゃん実ん中きやコオジ（ス
ダジイ）ちゅうとん有つて、食い
ぎやなつおつたで、コマタ橋ば渡つ
て山ん神イデの所んの山や、いっ
ぱちやひりやぎや行きおつた。

コオジの木は、高こうなつおつ
たで登つてちぎりやなんじやつ
たで、つこけとつとばひるうよ
ま他きやにや無かつた。

「コオジ」はカシの実よま小
もうして側たんな思うしとて、

木になつとつ時にや、中んコオジ
の見えんごてえ皮のうち被さつ
とつたで、そん皮のひとつでう
ち割れてつこけてくつとば待つ
とらんばしよんなかつた。

ひるうたコオジは、そんま
ま噛んしやあで半分にうち割つて、
中ん身ば生んままで食いおつた
り、ナべん中きや入れて皮にひ



びん入つて炒つて食えば、いっ
だんとんもうなつた。

「やじろべえ」カシの実の生り
口ん所んにイギリで穴ばうつば
ぎやて、竹ばうち割つて七寸ば
かんのヒゴばつくつて、穴ん半
分の長さまで差込うでローソク
ん火でヒゴば炙つて、下さみや
曲げて、ドングリん生り口ん真
ん中きやイギリで穴ば開けて、
そんにヒゴン先ば双方とめ差
込くうで、カシの実の生り口ん
へタの帽子ば被せて、吊りあい
ばヒゴば動きやてとれば、やじ
ろべえんひなつた。

【まつふね・ひろみつ／青井阿蘇
神社・文化苑「童遊館」】

「民俗主義文学論」緒論 ①

— 歴史と民族 —

小山勝清

四

かように、現存する日本の民俗は、多年にわたつて伝承されてきたものであるが、発生当時そのままの形ではない。人間社会は、たえず変遷して行く、日本の庶民の生活も少しずつ、しかし絶えざる変遷をへて今日に至つた。生活手段、生産手段等の変化進展がその要因と思われるが、それにつれて、ものの感じ方、考え方もかわり、生活の様式もかわつて、伝承されていく風俗習慣も少しずつ形を変えていったのである。そののみか、全く消え去つたものもあるうし、すっかり形を変えたもの、元の意味を失つたもの、かつては有要であつたものが今はもう習として排斥されるものすらあるのである。人口が増加し、住居地域が広大になるにつけ、元は同じものであつても、風土の影響を受け、別々なものに分化したものである。現代日本民俗学が研究の対象として採集しているのは、このように変貌した風俗習慣なのである。それ故に、ただ二つの資料をもつて本源をさぐることは、到底科学的な成果を得ることはできぬ。しかし、民俗学は史学とちがつて、科学的方法を用いている。それは全国各地域から採集したものを部門別に比較分類することである。そしてその結果、発生的には同じ根柢から出た風習と思われるものが、地域によつてちがつた姿をして伝承されていることがわかつたのである。しかしすべての民俗が一地域だけに孤立してただ一つ残っている場合は皆無ということも証

明されたのである。

なお重大なことは、同種のを比較した時、それは地域的差違があるのみならず、伝承の途中変形の度合が強いものと弱いものの差があることである。言い換えれば、原形に近いものと遠いものがあるということである。そこで民俗学者は一つの資料から時間の流れにそって過去へさかのぼるという、非科学的推理の代りに、同種の民俗を全国に集めることにより、原形に近いものに一段一段と近づくことができるということである。同時に、変形の過程を研究して、思惟の変遷を知ることができる。そして、それは決してきれることがない民族の生命の流れと共に流転してやまぬ民俗を把握することなのである。

歴史の資料たる記録には、流転も変化もない過去の墓石である。しかし、民俗学の資料たる風俗習慣は、人類の生命とともに流転するのである。従つて民俗学は、民族の生命の流れの中に生きたままの人間の姿を認識把握することができるのである。

五

以上述べたように、国の歴史は過去の記録文献を研究し、得たるところの政治、経済、軍事、宗教、文化等の史実を時代ごとに総合し、古きより新しき年代順に記述して構成する。

これに対して民俗学の記述は、前述のとおり同種の民俗資料を比較分析することにより、現在より過去にさかのぼろうとする。しかし、いつという年代がなく、基準がないから、すべての資料を総合して一時代を構成することはできぬ。民謡は民謡、祭礼は祭礼と、別々に記述してそれぞれに民俗的世界を構成する。

また歴史は、きれぎれに固定した史実を積み重ねつなぎ合せて構成するが、民俗学は切れ目のない水の流れをたどるように探求しなければならない。

歴史研究においては、史実という割り切った答が出るが、民俗学の資料には無限の過去をふんでいるので、歴史のように割り切った結論を出すことは不可能に近い。しかし、民俗学が求める答は、一度きりしか起らぬ繰り返すことのできぬ事件ではない。動いてやまぬ人間の思想感情の流れである。その流れの起伏変遷の流れのままに記述することが、民俗学が得るところの成果である。

この故、民俗学の記述は、論理でなくて文学的形態をとる。が、資料そのものはほとんど芸術的に表現されていることもこれにつながるものである。民謡、民話、郷土舞踊、民芸品はいうまでもなく、民間信仰の諸儀式、祭礼の様式等、すべて芸術的表現をとっている。

柳田国男氏の著述が民俗のきびしい科学的研究の成果であるにかかわらず、一般から文学作品と見られ、結論らしきものが非常に少ないことをいふかあるむきがあるのはこの故である。

柳田氏の著書は、民俗の各方面にわたるが、その記述の多くも各地域の民俗をたどる紀行文のごとき形態をとっている。が、この民俗を尋ねての紀行は、単なる地上の旅ではない。無始から現在まで流れつづけてきた庶民の生活の川を、過去にむかつてさかのぼる心の旅路である。われらは、この紀行文の全体があらわす柳田氏の思想感情を通じ祖先の生活、感情、思想の曲折をよみとるのである。はてしなる旅路の紀行文である。終りがなければ結論もない。しかし、読む人により、それぞれの結論を出すことはさまたげないだろう。なお、こうした柳田氏の著書は、わたしが提唱するところの民俗主義文学の一形態であることを付記する。

六

われらは、歴史を読み、歴史を知ることによって、歴史的な世界を描き出すことができる。われらは、この過去の世界に組織を見、人物を見、政治、経済、文化、宗教を見る。が、ここでも歴史を構成する資料の制約からのがれるこ

とはできぬ、即ち、すべてが史実——実在したものによって構成されているので、厳密な歴史的世界というものは、きわめて実在的、唯物論的、非芸術的に構成され、リアリズムの所産である。

この故に、史実にきびしい日本の史学者は、日本の国史を再検討し、非現実的、精神的な神代を抹殺し、神武紀元を否定し、日本の政治家が建国以来堅持してきた世界的使命を抹殺したのである。われらが過去の歴史的世界にロマンチックなものを感ずるのは、歴史のせいではなく、むしろ非実在的、唯心的、芸術的な神話のせいであり、史実を無視した物語、稗史小説のおかげである。

従って、現代の歴史世界から生れる歴史的世界観が、いわゆる唯物史観となるのも当然の帰結である。

かように、歴史の記述が歴史的世界を形成するように、考古学も人類学も、それぞれに世界を形づくるが、いずれも唯物論的、実在的で、神話を放逐する役目をうけもち、歴史と協力関係にある。

これらに対し、民俗学もまた、民俗学的世界を造成する。しかし、これもまた、歴史的世界と同じく構成する資料がものを言う。民俗学の資料である民俗は、前に述べたようにそのすべてが芸術的であるが、非現実的な言語と動作であり、つくられた芸術作品である。すべてが儀式化、芸術化されているので、現実（実在）そのものではない。神を祭る祭礼も、年間の行事も芸術化され、生産も祭であり、労働も歌謡を生んだ。物をかたどる民芸品も実用をはなれ非現実的につくられている。そして、本質はすべて非実在的、心的産物である神につながっている。二言でいえば、民族的世界は、人間が思惟し表現した世界である。その世界に見る人も草も木も水も動物たちも、神も自然のままの存在でなく、人間の主観から生れたものである。従って、山も木も草も動物も、人間の生活の中の存在である。人間をはなれての存在でなく、人間との関係の中にのみ見出される人間の山、人間の動物なのである。生物学者が見る自然でなく、人間の生活と結びついた自然なのである。従ってまた、それらは、民族の生命とともに生々流転する動く自然、動く山、時代を超越した人間なのである。そして、これが正に、民族学的世界観となるのである。

後 記

ようやくのことで民俗主義文学論の第一分冊をお届けする運びとなりました。一日も早く出版したいと思っていましたが、熊大病院から人吉の手塚病院に移って以後、生死の門をさまよっていましたので、今日になってしまいました。どうか危機は脱したというものの、体力の回復までにはまだ日時を要しますので、とりあえず分冊にして出版することにしました。

今回は民俗主義文学論の緒論のみですが、次回から各論に入りたいと思います。

なお、一、二回分冊を発行したのちに、民族主義文学会（ミヤ）の会則といったものをつくりたいと思います。最後に、皆さまのご批判、ご意見をお願いいたします。

昭和四十年十月三日発行

著者 小山勝清

発行所 民俗主義文学会
本部 熊本県球磨郡相良村四浦晴山

小山勝清

東京事務所

東京都杉並区阿佐谷北五丁目
六の一八五十嵐アパート五号室

小山勝樹

※（ママ）＝原文のまま

文学的形態をとる」というふうに言い切る。

その上で、柳田国男について言及する。すなわち、柳田の著述は「民俗のきびしい科学的研究の成果である」、しかしながら、残念なことに「一般からは学問的著述でなく文学作品と見られている」と述べる。これは柳田の著述に「結論らしきものが非常に少ないことをいぶかるむきがある」という点を踏まえて言っているのである。このような傾向に対して勝清はこう反論する。

柳田氏の著書は、民俗の各方面にわたるが、その記述の多くも各地域の民俗をたどる紀行文のごとき形態をとっている。が、この民俗を尋ねての紀行は、単なる地上の旅ではない。無始から現在まで流れつづけてきた庶民の生活の川を、過去にむかつてさかのぼる心の旅路である。われらは、この紀行文の全体があらわす柳田氏の思想感情を通じ祖先の生活、感情、思想の曲折をよみとるのである。はてしなる旅路の紀行文である。終りがなければ結論もない。しかし、読む人により、それぞれの結論を出すことはさまざま

ものを得ていたことになる。

そして、第六節に至つて次のように民俗学の特質を説く。

民俗学の資料である民俗は、前に述べたようにそのすべてが芸術的であるが、非現実的な言語と動作であり、つくられた芸術作品である。すべてが儀式化、芸術化されているので、現実（実在）そのものではない。神を祭る祭礼も、年間の行事も芸術化され、生産も祭であり、労働も歌謡を生んだ。物をかたじけなく民芸品も実用をはなれ非現実的につくられている。そして、本質はすべて非実在的、心的産物である神につながるっている。

こう述べるだけでは、何も小山勝清がわざわざ語らなくても一般に行われている言説であるかも知れない。しかし、これを踏まえての勝清の次のような言説には必ず耳を傾けなくてはならない。

げないだろう。なお、こうした柳田氏の著書は、わたしが提唱するところの民俗主義文学の一形態であることを付記する。

柳田国男のつた方法の特徴を、これはうまく言い当ているのではなからうか。柳田の著作はどれを読んでもたくさん材料が溢れ出てくるが、確かにさて結論がどこにあるのかさっぱり分らない、そうしたもののばかりと云っている。ここでは何れもその著作物全体を眺めわたす必要はないわけで、勝清提供の球磨山中の山女や山姥も登場する『山の人生』（大正十五・昭和元年）一冊を思い出してみるだけで充分だろう。柳田が紹介するたくさん民間伝承、その中にまさしく「庶民の生活の川」が蕩々と流れている。ただ、「終りがなければ結論もない」のである。読む者は、柳田によつて提供されたこの川から「祖先の生活、感情、思想の曲折」をめいめいで汲み取ることができるわけである。小山勝清は柳田に師事し、やがて柳田から忌避されるかたちで離れていく。しかし、少なくともしばらくのあいだ近しく接したのであり、接しただけの

一言でいえば、民族的世界は、人間が思惟し表現した世界である。その世界に見る人も草木も水も動物たちも、神も自然のままの存在でなく、人間の主観から生れたものである。従つて、山も木も草も動物も、人間の生活の中の存在である。人間をはなれての存在でなく、人間との関係の中でのみ見出される人間の山、人間の動物なのである。生物学者が見る自然でなく、人間の生活と結びついた自然なのである。従つてまた、それらは民族の生命とともに生々流転する動く自然、動く山、時代を超越した人間なのである。そして、これが正に、民族的世界観となるのである。

「民族的世界」「民族学的世界観」は、たぶん「民俗的世界」「民俗学的世界観」とすべき誤記であろう。それはともかく、山川草木も動物も人間との関係の中に見出される存在であり、大自然もやはり人間の生活と結びついた自然である、と勝清は言い切る。この『民俗主義文学論・緒論』中、最も輝きを放つ箇所ではなからうか。「藝

文研究」第五十五号（平成元年三月、慶應義塾大学藝文学會発行）掲載の松村友視「小山勝清『民俗主義文学論』（緒論）——複製・解題——」では、これを「右の一節はむしろ、小山が到達した世界観の表明とみるべきものだろう。小山はそれを民俗学に託したのだといってよい。そしてその到達地点は、同時に、出発地点ともはるかにつながっていた」と評価してある。こうした松村氏の見解には、大いに頷くことができる。というか、理論を展開したのはこの『民俗主義文学論・緒論』においてが初めてのことであったろうが、勝清は実際の作品の中ではずっと早い時期に実践していたことになりはしないだろうか。

小山勝清の著作物に触れたことがある人ならば、『或村の近世史』がすぐさま浮上してくるはずだ。

勝清は十代後半から社会変革の志を抱き、東京へ出る。堺利彦の弟子となつて活動し、中でも大正八年（一九一九）、足尾銅山の争議を指揮するのだが、争議のクライマックスに入つた段階で自分のやっていることに根源的な疑問が生じて身を引く。そして翌年の四月に故郷の相良村晴山へ帰る。社会的な運動には挫折したが、しかし勝清は自分

の育つた山村の深部に目を注ぐことになる。つましく生きる村人の姿の中にどのような生活観があるか、つづさに触れることができたのである。大正十二年（一九二三）に再び東京へ出るまでの間、勝清は村をじっくり見詰め、見つけた成果をまとめあげていった。そして、上京後、雑誌連載を経た後、大正十四年（一九二五）になつて『或村の近世史』を聚英閣から出版した。

これはどういう本であるかというと、第一章「村の事件帳」は村に起きたさまざまな事件が中心に語られている。第三章は小山勝清の父親とおぼしき人物などが登場しての明治維新後の村の変遷史。第一章も第三章も、共通して言えるのは生身の人間たちの悲喜劇である。村人たちは、入会地を共同で利用し、現金など使わずに日々を過ごしてきたという、いわば原始共産制と称すべき生活感覚を濃厚に有していて、時にはひよいと怪異なものを幻視する。大自然の中でそのような感性を有し、自給自足した小宇宙を共同に持っていた人たちなのである。だが、ここへ近代の商品経済が押し寄せてくる。入会地がお上によつて「官山」とされてしまふし、よそから移ってきた者

たちがめざとく金を稼ぐ。村人たちの保つてきた共同性は、次第に崩れはじめる。つまり、村という小宇宙の分裂や崩壊が第一章・第三章には描かれているわけで、しかもそのような不安定な状況にさらされながら、なおかつ村人たちは大自然への畏怖と親近感を濃厚に有して日々を過ごす。

象徴的なのが第二章「村の怪異」であり、この章では不思議な霊力を持つ「山の者」や「川の者」、柳田国男の『山の人生』にも出てくる山姥、あるいは「にっしいぎりぎり」と怒鳴る奇つ怪なる存在が登場する。村人たちと大自然との関わりは濃厚であり、そのような中で不安定ながらも日々の地道な営みが続いている、ということが『或村の近世史』には描かれているわけである。まさに「山も木も草も動物も、人間の生活の中の存在」なのである。山は人間との関係の中に見出されている山であり、動物たちも同様である。「生物学者が見る自然でなく、人間の生活と結びついた自然」が、勝清の若い頃の著作『或村の近世史』には濃厚に表現されていた、と言える。

だから、松村友視氏が「その到達地点は、同時に、出

発地点ともはるかにつながっていた」と論じているのは納得できる。いや、「はるかにつながっていた」どころでなく不可分のものだったのであり、小山勝清は作家として出発したその時点ですでに「民俗主義文学」を意識していた、と言えるのではなからうか。理論化できていなくても、作品自体はすでに充分に「民俗主義」の考えの実践であった。少なくともこの作家は文壇的な、いわゆる純文学とか私小説とか、そのようなものには手を染めたことがない。一般大衆向けの読み物を結構な数で書き残しているの、大衆作家、児童文学作家と見なされてしまふ。それはそうだとしても、根つこのところに民俗の心に根差す文学を目指し、完成させたいとする熱い思いを出発当初から抱き続けた作家だ、と言える。少なくともこの『或村の近世史』、そして『彦一頓智ばなし』は民俗主義文学の範疇にすっぽり入る作品なのではなからうか。戦後になつて書いた『それからの武蔵』も、単なる大衆小説とみなせない。民俗主義文学的な要素が見られる作品、と言える。

【まえやま・みつのり／八代市】

民俗学者とダム

— 湯川洋司と五木村 —

高知大学助教 森 明香

湯川洋司先生は「山の暮らし」の研究をライフワークとした民俗学者である⁽¹⁾。『くまがわ春秋』の読者の中には湯川先生を直接ご存知の方も多いかもしれない。湯川先生にとつて、福島・奥会津と並んで生涯通い続けた主要なフィールドのひとつが五木村だったからだ。湯川先生が五木村を初めて訪れたのは東京教育大学（現・筑波大学）の学生だった1975年3月のことである。1978年からは、



奥さま撮影の湯川先生（ご子息・洋史さん提供）

川辺川ダム建設によって五木村中心部が水没することを見据えた五木村学術調査団に参加し、焼畑慣行等に関する民俗調査をまとめ上げた⁽²⁾。その後、熊本県教育庁文化課学芸員を経て山口大学

に着任して以降も、継続的に五木村を訪れ古老の語りに耳を澄ましては丹念に民俗誌を編み続けた⁽³⁾。

山口大学助教時代から1991年に上梓した『変容する山村』は、70年代中頃から80年代中頃までの調査に基づいて書かれた論考を元になっている。そのうち一章分で五木村について書かれており、村の山ノ神信仰や狩猟、山師の仕事や焼畑を取り上げ、時代の中で焼畑・狩猟村落から林業村落へと転換を遂げた五木の民俗誌を描いている。だがこの章は「ダムに沈む五木村」と題されているものの、ダムについての直接的な言及はほんのわずかだった。ダムそのものを問題化するにはまだ現実味のない状況だったとも推測できるし、山村の変容を民俗を通して捉えることに専念していたがゆえに、無意識のうちに現在進行形のダム問題からは距離をとることで「民俗学」を徹底しようとしていたのかもしれない。ともあれこの段階では、ダム建設をめぐる問題は後景に退いていた。

それから6年後、湯川先生は『山の民俗誌』という一冊の本を新たに書き起こした。全体の約4分1を使つて五木村について論じているのだが、『変容する山村』との違いを

読み手に強く印象付けるのは、ダム問題について積極的に触れている点である。

大部分は焼畑についての丹念な記述である。持続可能性に重きを置いた論理のもとで成り立っていた焼畑が、単線的で右肩上がりの成長を是とする時代の荒波に巻き込まれ衰退しつつあった中で、人々が「山の暮らし」をどう切り開こうとしていたのかを、一人のダンナ家の「農業日誌」を手掛かりにして分析している。他方で、大災害を契機として「山の暮らし」に対する誇りが薄れていった現実にも言及した。

そして章末、ダム建設について言及した部分は9頁にわたる。ダム計画が持ち上がつて以降の村の姿勢に関する時系列を追いつつ、計画に異議を唱える声が中下流域から上がっていることも触れた上で、こう提起する。「山のむらしさを損なわずに自律的な暮らしの設計が可能になる道を模索することが大切になるように思われる。ダムという形の国家事業ではなく、その自立を応援するような政治の配慮が山のむらには求められるのではないだろうか」（湯川1997・139）。

【注】(1)湯川先生が述べる「山の暮らし」とは、具体的には「山を開いた焼畑、

(2)五木村学術調査の実施に際し元五木村役場職員で郷土史家でもあった故・佐藤

木村学術調査』（人文編・自然編二分

鳥獣を狩る狩猟、材木の伐採をした杣仕事、製材をした木挽、木材を搬出した木馬ひきや川流し、材木を細工した木地屋、炭焼き、鉱山で働いた山師、川の魚をとる川漁、さらには山の草木を利用した道具作りから、漆掻きやハゼ採取などの「様々な山の資源を利用する知恵と技術に支えられてきた」暮らしだという（湯川1994・24―25）。

光昭氏の尽力があつたことを、湯川先生は次のように紹介している。「川辺川ダム建設計画が具体化し始めたときにも、水没対象地区を中心に非水没地域をも含めた五木全村に及ぶ歴史・民俗・自然・文化財等の総合的調査の実施を二貫して主張し、建設省（当時）予算による学術調査の事務局を引き受けて、調査報告書を編集刊行し続け、最終報告『五

冊、87年）の出版へと導いた」（毎日新聞2002年3月15日）。湯川先生は調査団の一員として「第四章 農耕の形態とその特質」（『五木村学術調査 人文編』pp147―216）を書き上げている。「民俗誌を書くことについて、湯川先生は「年寄りたちの口から語られた言葉によりながら、その言葉の背景や底に潜んでいるものをすくい取る」営為だと、述べている（湯川1997・37）。

湯川先生は、焼畑に基礎を置いた生活が終息し成長の論理が山をも席卷していく過程を目の当たりにするなかで、山の暮らしが失われていく論理と、ダム建設計画を容認していく論理とが共振していたことに、気づいていったのではないだろうか。

実際、毎日新聞の連載で、湯川先生は以下のように振り返っている。「私が五木村を訪ね始めた1975年当時村はすでに川辺川ダム建設問題の渦中にあった。だが焼畑農耕をはじめとする山の民俗に関心を抱いていた私は、それを村の問題とだけ受け止めて、その後五木村を何度も訪ねようとも村はいつまでも変わらず、私を受け入れてくれると思っていた。だが移転する家が出始め、性根を抜かれた墓石が墓地の片隅に積まれる姿や、立ち退いた家のコンクリート基礎がむき出しになった様子などが目につくようになって、この大変さや深刻さを考えるようになった。五木村はどうなるのだろうか、と不安にもなった」(毎日新聞2002年6月28日)。

後年の研究成果報告書では、「久しぶりに訪ねた高野地

区で、今まであった家がなくなりコンクリートだけがむき出しになっている宅地跡を目にしたときに、いままで十分には意識できていなかったことが、はつきりと目の前に姿を現したような気がした。自分のしてきた民俗調査が、ダム建設に伴うものであることを知りつつも、それはまったく迂闊なことであった」と記している(湯川2007:84)。

湯川先生は晩年まで、里とは異なる「山の暮らし」とその自律的な存立を成り立たせるものを実証的に迫ろうと、探求を続けていた(湯川2015)。自分のやってきた仕事に対して「迂闊」とまで表現した湯川先生の思いは、どのようなものだったのだろうと思う。湯川先生は2014年9月30日、62歳でこの世を去った。山村に育ち、山の暮らしをライフワークとして、ダム建設計画に長年直面する五木村に通い続けては民俗誌を編もうと試みていた(4)。社会学者(のはしくれ)である筆者には、いまでは湯川先生が遺した文章をもとに想像するしかない。

【もり・さやか／高知市】

【注】(4)『湯川洋司の残した仕事』を執筆したご子息の湯川洋史氏によれば、「病を得てより自身の著作集や調査ノートのまとめなどを行うことを企図していた。本文にて言及した『山村民俗生活誌』や山村史資料集はその試みのひとつでもあった。この試みのなかでとくに惜しまれるのは、

湯川の構想していた写真民俗誌の構想だろう。五木村・会津・惣川を対象として、写真にキャプションをつけ、暮らしの移り変わりを具体的に示すとともに、そこで出会った話者についての記述も載せる計画だったが、その実現は不可能になった。生活誌という名がつくのなら、そこには

湯川が40年以上にわたって見続けてきた総体としての暮らしが描写されるはずだった」という(湯川2015:83-84)。なお、2014年2月に小林正明氏によって『五木歳時記』が刊行された。この中で、湯川先生は『五木民俗写真誌』の誕生の文章を寄せて喜びを表している。

参考文献

- ・五木村総合学術調査団 1987、『五木村学術調査』自然編・人文編
- ・小林正明 2014、『五木歳時記』花乱社
- ・佐野賢治 2015、『民具調査から山村研究へ―民俗学者・湯川洋司の誕生―』、『やまぐち地域社会研究』(13)
- ・湯川洋史 2015、『湯川洋司の残した仕事』、『やまぐち地域社会研究』(13)
- ・湯川洋司 1991、『変容する山村―民俗再考』日本エディタースクール出版部
- ・湯川洋司 1994、『九州山地に明日を訊く』、朝日新聞西部本社編『九州山地に生きる』葦書房

- ・湯川洋司 1997、『山の民俗誌』吉川弘文館
- ・湯川洋司 2004、『九州山地五木谷における堂を中心とした村落自治の伝統に関する民俗学的調査研究』平成13年度～平成15年度化学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書
- ・湯川洋司 2007、『川辺川ダム建設計画に伴う熊本県五木村の村落再編過程に関する民俗学的調査研究』平成16年度～平成18年度化学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書
- ・湯川洋司 2011、『高度経済成長と山村生活の変化』、『国立歴史民俗博物館研究報告』171

もう一つの「明治維新」

―壊滅寸前の仏教を救った僧侶「黙雷」①

富永和信

まえがき

平成三十年は奇しくも明治百五十年で、平成最後の年となる。維新に大きく関わった自治体などでは、維新を「材源」とした様々な事業を企画して地域活性化を目論んでいる。このような歴史再考の機会を活用することは大いに推奨されるに異論ないところである。

しかし大きな節目となる歴史の転換とか変革についてよく見ると、後世に華々しく表舞台に残る歴史とは別に、表に出ない見過ごすことのできない歴史が存在していることも事

実である。

私は、我が国の歴史上最も激変したとされる明治維新（二八六八年）期に於いて、四面楚歌の荒波にさらされ、風前の灯の状態になった仏教が、しぶとくも復活するに至ったことに極めて素朴な疑問を持っていた。いつか機会があったら、その疑問を調べてみたいと思っていた。

ところがそれを調べる前にある偶然の出会いから、前述の壊滅寸前の仏教を命がけで救ったとされる一介の僧の名を知ることになった。

その僧こそ長州徳地（現山口市徳

地）出身の「島地黙雷」僧であった。

この小稿は、黙雷の出生・幼少期の山口県周南市四熊峠及び山口市徳地から、終焉の地・岩手県盛岡市、そして活躍の地・京都を大雑把に迫ってみたい。この仏教界の大事を黙雷僧一人で成し遂げた訳ではなく、当然ながら数少ない同志と有志者の協力・支援があったからであるが、黙雷が中心になって成就したことは間違いない事実である。

当時の仏教が置かれていた状況

明治維新に至って、聖徳太子の時代から我が国の宗教の主軸として根づいてきた仏教の存在基盤が根底から否定され、放逐されようとは仏教界僧侶のみならず、一般信者にとっても青天の霹靂であつたろう。

このような仏教の非常事態に至つ

た経緯は複雑で簡単に説明することは容易ではないが、あえて簡略に述べるとすれば次のようである。

一つは明治維新政府が目ざす近代化に対して、昔からの因襲が連綿と続く仏教界の思想・しきたりが相容れられないこと。国家君主、つまり国体の統率者としての天皇制を確立するため神道中心の政策を推進したので、結果として仏教は有害・不要なものとされた。このことが国の基

本方針となり、具体的には排仏思想そして廃仏毀釈が全国津々浦々にまで拡がっていった。

二つは仏教界の一部であるが、仏教本来の救世、浄土への教えの基本精神から逸脱して、世俗に走る僧侶が出て、人々の信頼を失っていたことも一因であつた。

「黙雷」を偶然知る

維新政府のとつた仏教放逐政策については後述するが、ここではまず傑僧「黙雷」を知ることになった偶然の出会いから話を始めよう。

山口市徳地の山あいを走る国道三七六号の口ハス島地温泉の道路沿いにひっそりと佇んで建っている小さな草堂がある。入口には「甘棠山雨田草堂」とある。



甘棠山雨田草堂(平成 27 年2月撮影)



堂内にある扁額。小松宮彰仁親王が黙雷上人のために揮毫された

明治三十一年に黙雷還暦祝いとして島地の有志によって建てられたもので、雨田は黙雷の雅号。堂内にある扁額は小松宮彰仁親王の直筆である。

私はかつて、この道路を通る度に辺鄙なところにある小堂にしては大層な雅号をつけたものであると、不思議に思っていた。三十年ほど前にたまたま当時の徳地町長さんと懇談する機会があった時、例の草堂のことを聞いてみたら、町長一喝、「あんた県庁職員であるのに当地出身の有名な黙雷上人のことを知っちゃらんのか」「はあ、申し訳ありません、不勉強で」と謝ったことがあった。

このような経緯があつて、私の「黙雷」探しの旅が始まったのである。

【とみなが・かずのぶ／山口市】

砂時計

—思い出るままに④—

小野武己

2、叔父（母の次兄）のこと

③卵の話

佐世保市早岐町の我が家では五羽のニワトリさんを飼っていた。町のお米屋さんに行って、米糠こめぬかや配合飼料を貰ってくる。ハコベを刻み、アサリやシジミの貝殻を石で細かく砕き、「ニワトリさん、明日は沢山産んで頂戴ね」とお願いしては、餌箱に入れるのだった。時折、小屋から出して、我が家の狭い庭を散歩させたりしたのだった。でもたいがい朝方、二個しか産んでなかったのである。一個は父親が食べる。もう一個は五人の兄弟が食べるので、五日に二回しか新鮮な卵かけご飯が食べられなかった。母親は、ほとんど食べてなかった記憶が残っている。時たま三個産んでくれる時があった。これはお母さんの分だ、と思わなかったのは親不孝であつたけど、おおニワトリさん、有難うね、これで卵かけご飯を食べるの

れないし、子供なので正直にありのままを言ってしまったのかも。かもしれない。

叔父さんは、あつけにとられてしまつてか、言葉も出ずに僕の顔をまじまじと見詰めるだけであつた。

その時、叔母ちゃんが、博多弁でゆつくりと疑問に答えてくれたのであつた。

「タアちゃんね、叔父ちゃんは偉かとおお。お仕事も一杯せんといかんとおお」

「だから卵、二個食べるとよお」

「どがんすつと、偉くなるとね。卵が二個食べられるようになつとね」

「タアちゃん、お勉強ばしんしゃい、一所懸命勉強しんしゃいね」

「よか、判つた、叔母ちゃん、俺い、沢山勉強すつけん」

「そうよ、タアちゃん、しっかり勉強ばすつとよお」

「叔母ちゃん、おかわり頂戴」

僕は銀シャリの真つ白なご飯をおかわりし、残り少なくなつた生卵に醤油をしつかりとかけ回したのであつた。

（おわり）

【おの・たけみ／小児科医院院長、宮崎市大塚町】

が一日早くなつたあ、と子供は單純に心躍らせるのであつた。夏休み、叔父さんの甥つこ、姪つこが博多の叔父さんの豪邸に集まる。

昨夜三階の大広間で散々遊んだ。さあ、朝食の時間だ。テーブルを突き合わせた畳四枚ほどの広さの食卓があり、正面に叔父さんがどつしりと座る。周りに叔父さんの子供たちが座り、その後ろに甥つ子、姪つ子がグルッと食卓を取り囲んで座る。二人の女中さんが、目の前に生卵を一個ずつ置いていく。

やがて、準備完了。叔父さんの「どーれ、頂こうか」の合図で、皆んなが食事を始めるのだった。子供が多いので、何かしらワイワイガヤガヤである。食べ盛りの僕は家では五日に一回の卵かけご飯なのだが、初日から卵が出てきたので食が進む。一膳、二膳、三膳目はもう醤油かけご飯になつてしまふ。ふと見ると、叔父さんは一膳で一個、二膳目でもう二個の卵をかけているではないか。

それを目ざとく見てしまつた僕は、「叔父さんな、ズルかあ、卵を二個食べるとるっちゃがあ」と言う。

「ないごて、二個食ふつとね」

我が家の貧しさが、ついつい言わせてしまつた言葉かもし

くまがわ狂句

村上鬼拳

ワイングラス 媒酌も無く客も無く
五月病 地球の裏でばしあるか
行方不明 血眼になる文化庁
全然違ふ 歴史は曲げてしもうとる
いつも旬 何処から撮られたつていい
合併して 面積だけは日本一
怪しい 年金で建つ家で無ア
ひつ縮み 「家庭の医学」読み漁り
晴れたア この一瞬が撮りたくて
淋しさが 覚悟の移住だつたてエ

【むらかみ・きけん／人吉市】

年念し
450 誕生
下ろし
生記書

小説・相良清兵衛

14

山口啓二

当主長毎公と筆頭家老清兵衛頼兄は、薩摩島津家七十七万石の十八代領主となっていた島津松平家久公と以前から交流があった。佐土原城主の娘で清兵衛の嫡男内蔵助の妻『とき殿』とも、家久公の従妹で仲立ちでもあった。慶長十七（一六二二）年の正月を過ぎたこの日も深い霧の朝、いきなりその家久公から見舞いと称して球磨を訪問したいとの知らせが舞い込んだ。

「清兵衛、如何いたそうか。こんな田舎に家久殿をお招きしても良いものかのう」

「殿、何を仰せられます。島津様は外様なれど加賀前田家に次いで押しも押されもせぬ七十七万石の大大名、我等から御挨拶するでなく、その御領主様がじかにこの小さな球磨の地にお越しになられるのですぞ。これは滅多にない事にござりますれば、九州はおるか西国、いや、国中の諸将も大変驚くに違いありません。是非ともお招き申し上げましようぞ」

「して、宿は如何いたす」

【前回までのあらすじ】父休矣の後を継いだ清兵衛は、藩内の本格的な基盤整備を進めていき、屋敷の地下にはキリスト教の洗礼池作りや、『青井大明神』の遷宮にも取りかかった。

「幸い内蔵助と拙者の部屋は合わせて八十程あります故『とき』と従妹の家久公には内蔵助宅へお泊まり戴きましようかと。なにあ、伊勢兵部殿や肥志島紀伊守らご家中の方は我が家にお泊めすれば、他の家臣はなんとでもなりましたやうや。それに新しくした青井大明神のお披露目も出来まます。南藤藤原相良家ここにあり、と家久公にご覧戴きましようて」

「左様か。成程あい解った。そちの嫡男内蔵助の嫁ごは島津様の従妹、元々家久公の肝入りであつたな。ではくれぐれも遺漏の無きよう計らうべく」

「かしこまりましてございます。そういえば家久公の親父殿の義弘公、叔父に当たられる兄上の義久公、忠久公に

は随分手痛い目に遭わせられましたのう。あの島津四兄弟は薩摩と大隅、日向を手の内にされた頃からこの九州全土を我が領地にしようと画策され、殿のお父上の義陽公が支配されて、我が親父殿を城代として千人程で守らせておられた水俣城を、なんと大軍三万五千の兵で囲み、城の明け渡しを迫られました。丁度拙者も知らせを聞いてひとり水俣に馳せ参じましたが、あれからもう三十年が過ぎましたか。それからの我らは幾度も島津の先鋒となつて豊後攻めで働かされました。ひどい時代にござりました」

「そうであつたな。余が八つの頃とは憶えておるが、今は昔じゃのう。島津との戦もいろいろあつたと聞いておる」

清兵衛は自身がまだ軍七と名乗り、十四歳で初陣を果たした三十年以上も前の事を思い出していた。

そのころの水俣は相良氏の領土で、薩摩との国境にあり、清兵衛の父犬童頼安が城代として家臣凡そ

千人で警護しており、幾度の薩摩軍の攻めにも動じず国境を守り抜いていた。ところが島津義久兄弟は、豊後大友攻めの足掛かりとするため大軍で水俣を取り囲んで攻め、開城を迫つて来た。それでも頼安は城を取り囲むように柵を張り巡らせ島津軍の侵入を阻んでいた。

天正九（一五八二）年二月になると、薩摩は海と陸から多様な策を講じて何度も攻めたてていたが、城の護りは堅くすぐに落ちる様子はなかった。頼安は今まで茅葺だった屋根を竹瓦に替えさせて城を火から守つたが、それでも薩摩大口の大將新納武蔵忠元は執ような火矢を放つて攻め立ててきた。

四年もの間この城を守り抜いてきた城代犬童頼安は重臣らを集め、

「ここ五十年あまり薩摩と戦つて常に勝利して参つたが、先般大口で敗れて以来は我らに分がない。さらに薩摩は執ようにこの水俣城を攻め立てて来ておる。ここに留まつたままでおれば薩摩は勝ちに乘じてさらに我が城を攻め落とさんしよう。そうなれば水俣を守る我ら全員、末代までの恥となる。敵軍はまだ態勢が整つておらぬとみた。よつてこれより討つて出て進軍しようと思うが如何じゃ」

と言つて翌早朝開門し島津軍に突入、敵味方入り乱れ

■主な登場人物

相良清兵衛（犬童頼兄・軍七）＝相良家 家老

相良頼房（長毎）＝相良家 第20代当主

大乱戦となったが、双方に百五十名余りの死者が出る羽目になった。留まるも進むももう策は尽きていた。この後も一進一退の戦闘は続き、水俣城はその後も火矢を放たれた夜襲をかけられるまでになった。

そのころ人吉城の脇にある延命院で修業をしていたのちの清兵衛こと犬童軍七は、父頼安の守る水俣の城が薩摩の大軍に攻められていると聞き、未だ暗く深い霧の朝、延命院をひとり抜け出し昼夜を徹して進み、次の日の夜によりやく水俣に到着、夜中に柵を乗り越え城に侵入した。未だ数えて十四歳、初陣としては若過ぎる歳であった。軍七は父頼安とようやく会う事が出来、敵の進軍に備えた。夜になるとまた薩摩は城の周りを取り囲み火矢を放ち、篝火を焚いて銃撃を加えた。その攻防はその後数カ月も続いた。初秋のある朝、突如矢文が城に射ち込まれた。敵軍の将新納忠元^{にいろうただもと}からであった。

『秋風に 水俣落つる 木の葉城』
と連歌の上の句が記されていた。

「なんとこしやくな、薩摩には歌を詠む余裕さえあるのか」
しばらく思索した頼安は、
『寄せては沈む 月の浦波』

持ち堪えられよ」

と大きな声で叫んだのだった。傍にいた薩摩の武士が、
「ご奴、裏切りよつたな。ふざけたことを！」
と、半五は柵から引きずり降ろされ、その場で切り殺され首をはねられてしまった。

目の前で殺された溝辺半五に犬童美作頼安は、
「彼奴は元は薩摩人、我が身を棄てての忠臣の志まことに感じ入った。皆の者、殿の命に従いここは城を堅持し味方を待とうぞ。殿をはじめ援軍さえ到着したら薩兵を皆殺しにせん」と。

しかし反撃もここまで、水俣城は三万五千の島津の大軍に包囲されてしまったのであった。島津はその後すぐに和議の使いを八代に差し向けた。さしもの義陽公も八代にいた重臣を集め、

「薩摩が和議を申し込んで来よつた。余はすぐにも八代・球磨・芦北の兵を従え水俣に進軍したいが敵は幾千万、いかようにも数が違いすぎる。我が軍としてもこのまま戦えば必ずや多くの犠牲をこうむるは必至。城も壊され痛手も大きいであろう。もうこれ以上兵を失いたくはない。この際水俣は島津にくれてやろうと思うが、皆のものの如何か」

と返した。この下の句を詠んで、敵ながらあつぱれ、と敵將新納武蔵忠元は感心し、一時攻撃を猶予したその隙に、頼安は城内から八代の義陽公のもとへ援軍を求める使者を送った。義陽公はその使者伝助に『今は戦わず皆して籠城し、援軍に備えよ』と伝えさせた。伝助は夜遅くに柵を乗り越え入城しようとしたが、その際敵軍に槍で太ももを突かれた。それでもなんとか城内にたどり着いて殿の返書届けたのだった。

さらに二日後、義陽公は溝辺半五を使者にたて『まもなく援軍を送り込むゆえ、無駄に戦わず籠城して城を守り抜け』と伝えさせた。

しかし半五は真夜中になって柵を登る際に、はからずも薩軍に捕えられ、敵將新納武蔵忠元に、城の明け渡しを申せば薩摩武士に取り立てると諭され、でなければここで成敗すると脅された。溝辺半五は遂に渋々了承し、敵監視のもと柵によじ登った。だが半五が城に向かって放った言葉は、

「相良の衆、拙者八代の溝辺半五、殿のご伝言にござれば心して聞かれよ。あと三日のうちには八代・芦北・球磨の援軍を差し向けるよつて此処は無理に戦わず、籠城して

集まった重臣達はみな、殿の言い分ごもつとも、という結論になった。

この結果は使いによつてすぐに水俣に届けられ、その後薩軍の將新納忠元に渡された。直後に和睦の使者が城に入った。城の警護に当たっていた美作頼安は使者に、

「残念無念、殿は開城を決められたか。ただこの和睦の条件がのう、誠にもつて実に気に喰わぬ。今まで薩摩に齒向かい薩摩の私怨^{しえん}を買った八人を差し出せ、となつておるが、そなた新納殿にお伝え申されよ。八人とも忠義で相良家の御為に戦ったのじゃ。易々とお渡しする訳には参らぬ。この者共の首が欲しければ総動員で攻めて参られよ。我ら八人と共に城を枕に死するのみ、と」

この返事に忠元はいたく感じ入り、さらに使いを出して謝意を伝えた。

「御意見ごもつとも。誠に失礼いたしました。仰せの通り八人は忠義をもつて君主に仕えられた。この事はもう二度と言わぬゆえ、すぐに城を明け渡し願いたい」

この八人とは溝口武蔵、同但馬、同飛驒、同備前、前田監物、同下野、淵上大和、小島備中のことで、いずれも薩摩軍との戦いにおいてことに新納忠元を苦しめ、相良

外来語から学ぶ英単語 (35) …… 藤原 宏

フリーズ・フリージング・フリーザー・フローズン freeze freezing freezer frozen

“Freeze!”は命令文で「動くな!」の意ですが、これを「please (プリーズ)、どうぞ」と聞き違えて事件が起こることもあります。“Water freezes at 32° F.”(水は摂氏32°で凍る)のように、freeze (フリーズ)は「凍る・凍って固くなる・凍らせる・凍らせて固くする」意です。

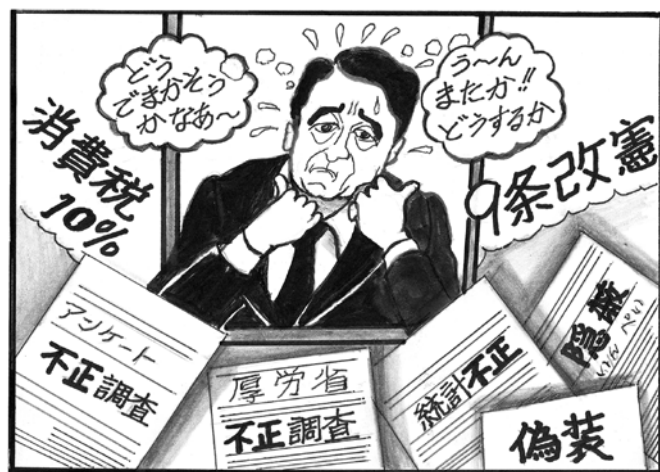
“32° F is the freezing point.”(摂氏32°は氷点です)のfreezing (フリージング)は、「freeze すること・凍ること」の意の動名詞形ですが、“I am freezing.”(私は凍るほど寒い)のfreezingは、「freeze しつつある」意の現在分詞形となります。

freezer (フリーザー)は「freeze するもの・人」のことで、「冷凍庫・冷凍器・冷凍加工業者」を意味します。

frozen (フローズン)は「freeze された」意の過去分詞形で、「frozen foods (フーズ)、冷凍食品」「frozen shoulders (ショールダーズ)、五十肩」のように使われます。

「冷却する・冷凍保存する」にはもう一つrefrigerate (リフリジャレート)があり、冷蔵庫のことをrefrigerator (リフリジャレーター)、短縮してfridge (フリッジ)ともいいます

(402)



— 国の統計や調査が、いい加減 —

ひどい、ひどい。賃金調査のズサンさに国民は驚く。それを基準にした失業保険などが低く抑えられていた。年金は下げるだけ下げて、もう我慢できません!

うんぐ…
げっかん・ぎひょう

軍勝利に特に貢献したつわもの達で、薩軍にも特に名が知れ渡っていた武人達であった。

相良清兵衛こと若き日の犬童軍七は、城代犬童実作頼安の傍にいた。十四歳の軍七にとつてこれが初陣ではあったが、結局この戦いで軍七が抜刀して戦うことはなかった。

「父上とここで戦いとう御座りましたが残念にございませう。いやはや薩摩の軍勢はかなりのもので」

「そうじゃな軍七、殿のお考え通り、あのまま籠城しておつて援軍が来たとしても我が軍に勝ち目はなかったろうな。島津兄弟は既に薩摩、大隅に加え日向を手にし、次なるは筑紫や豊後を、ひいてはこの九州全土を手中にすることを願つておるようじゃ。だからこそこの水俣が必要なのじゃ。こうなるとこれからは我が軍も島津に加勢するほかはあるまいのかもしれないなあ」

天正九(一五八二)年九月二十七日、ついに南の砦の水俣城を開け渡す事となった。この頃の相良氏は人吉球磨のほか水俣・芦北・佐敷・八代をはじめ小川・宮原、さらに松橋の豊福にまで出城を築き勢力を伸ばしており、南の境界を水俣で防護、長い間島津の北進を阻んでいた。その頃の相良氏は八代がその中心となっていた。十五年ほど前

まではそれに加え人吉の南、薩摩の大口と菱刈をも所領としていたが、『砥上の戦い』の折りに敵の奇策『釣り野伏せ』に嵌り、千名近くの兵と大口・菱刈を奪われた。そしてこの度の水俣落城である。島津四兄弟は相良義陽に隈本阿蘇一円と甲斐一族を攻めさせて隈本を手に入れたのち筑紫を攻め、勢い豊後大友を攻め、九州統一を狙っていたのだ。そのために先ず水俣を落とし、さらには佐敷と八代を手にしたかった。それからは阿蘇の甲斐氏攻めである。

半月後の十月九日、島津義久は次弟の義弘を使者とし、八代城にいた義陽公に和議の誓紙を持参した。ついに公も承諾され、ここに相良氏は鎌倉以来初めて島津の軍門に下ることとなった。島津から出された誓紙には、大友宗麟を討つために先ず甲斐一族を攻める事などが書かれてあった。義陽公は代々の甲斐一族との誓紙も守らねばならず、かといつていま島津に歯向かえば確実に滅ぼされる。島津にも甲斐にも認められる為には、甲斐と戦い討ち死にするより道がないのかとすでにここで悟つたのであった。それが響野原での戦いとなり、義陽公はそこで甲斐宗運に首を差し出すことになるのである。

(つづく)

【やまぐち・けいじ／人吉市】

倉敷便り

②6

絵と文／原田 正史

第二回津軽紀行③

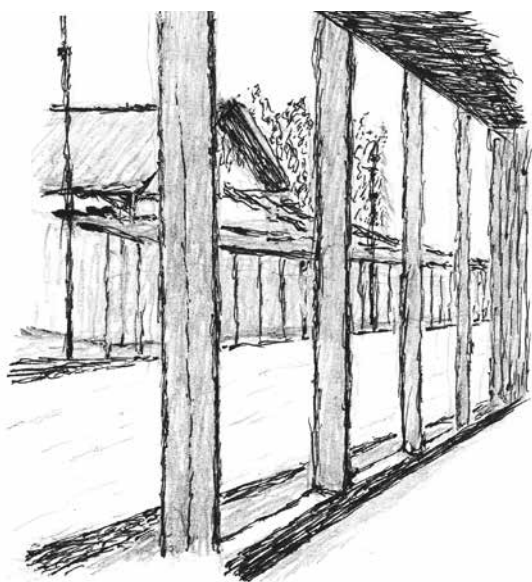
弘前駅に帰ってみると、岩木山麓訪問の時間が短かったため、時間が余ってしまいました。再度、案内所の指示に従って、弘前の東側に位置する黒石市を訪れることにしました。利用する交通機関は、JR弘前駅に併設されている私鉄弘前鉄道黒石線です。

跨線橋を渡って黒石線のホームに出ると、銀色に光る二両編成の電車が見えました。僅かな乗客の殆どが周辺地域から弘前市内の高校

に通学する生徒たちであり、多くは女性徒でした。その日は休日ですから、クラブ活動、特に女生徒に関連する行事があったのでしよう。やがてベルが鳴り響き電車が発車しました。ホームを離れ、少し進んだところから、かなり急傾斜の坂を登ります。二両目の後部座席にいる私からは、一両目の内部の様子が平坦なところを走る場合と違い、見上げるような感じでよく見えました。電車は^{さうわん}噪音を響かせながら左右・上下に激しく振動しました。特に二つの車輛の連結部分は、今にも千切れるのではないかと思われる程のすさまじい

動きです。響きわたる噪音で、乗客は会話など出来る筈がありません。列車には銀河鉄道など情緒のある名称のものがありますが、この黒石線は、まさに騒乱鉄道そのものと言えるでしょう。このまま走り続けると、間もなく車体がバラバラに分解するだろうと心配していたら急坂は終わり、ホッとしました。

弘前から黒石までは、東へ直進すると最短距離なのですが、通常集落地は平坦な中央部より周辺の山地山麓部に集中するようで、この黒石線も主要集落地を通過するために西へ湾曲しながら進むのです。人吉盆地でも湯前線が開通する前の湯前・多良木・免田の各駅周辺は、所どころに樹木が見られるだけの寂しい原野でした。それぞれの中心集落は盆地



黒石市中町の「こみせ」通り

周辺の台地の上にあり、雨季や台風の影響毎に氾濫原となる平坦部の川沿いを避けた立地条件のもとに形成されました。

電車は約20km走り、広大なリング

畑を抜けて、出発時の騒乱状態を忘れたかのように到着黒石駅に静かに到着しました。ちなみに日本一のリングの産地である青森県は、2位の長野県の凡そ4倍の生産量であり、

しかもその殆どが弘前や黒石をはじめとする津軽平野南部地域によるものです。車窓から見た団塊状に実をつけたリングの木の連なりは、その象徴的な姿だと言えるでしょう。

黒石駅からは案内所で貰った市内地図を頼りに、藩政時代の面影が残る

とされる中心街の中町を目ざして歩きました。案内所の話ではすぐ近くとの事でしたが、なかなか到着しません。どうも案内所の感覚は徒歩ではなく車での移動の事だったようです。十一月初旬だというのに、晴天のもと夏のような強烈な日差しが容赦なく照りつけました。北国の秋の寒さを予想して厚手のジャケットを着込み、更にその上にダウンジャケットを重ね着した私は、少し歩いただけで全身から汗が噴き出し、蒸し風呂に入った状態となったので、ダウンジャケットを脱いでリュックに押し込みました。しかし少し歩くとまた汗が出てきたのでジャケットも脱ぎ捨て、上半身は下着姿の哀れな姿になりました。それでもリュックを背負っていた事から、どうにか格好はつい

たのです。もしリュックが無かったらと思うと、今考えてもゾツとします。

中心街の中町は駅からかなり遠い所にありました。ここで藩政時代の面影を深く残していたのは「こみせ」と呼ばれる、町中を通る人たちを雨や雪から守る庇^{ひさし}でした。昔のアーケードとも言える構造物です。この「こみせ」の役割はやはり冬季の雪よけでしょう。そのために屋根を支える支柱には、太い角材が使用されており、北国ならではの景観だと言えます。なおこの地域は平成17年に「重要伝統的建造物保存地区」並びに「美しい日本の歴史的風光百選」に指定されています。また、藩政時代というのは江戸時代に入ってから、弘前城主である津軽家（10万石）の分家が黒石（1万石）を与えられ

黒石藩を新設した以後のことです。なお、黒石には城は無く、陣屋が置かれていました。

中町には意外に食堂が少なく、しかも昼時であつたためどこも満員です。順番が来るまで待つていると、予定の電車に間に合いそうにありません。仕方なく駅まで引き返し、隣接するスーパーで鮪を買って、中食としました。ところが使用されている名も知らぬ地元の魚が格別においしく、北国へ来ていることを強く意識させられました。

黒石を後にして弘前に戻った私たちは、駅前のバス停で料金一律千円の青森空港行きのバスに乗りしました。途中、津軽平野の末端部に存在する浪岡があり、ここは人吉、更に言うならば郷土史家益田啓三氏に

とつて極めて有縁^{うゑん}の土地なのです。ここでバスは段丘崖を乗り越え、段丘上を走るようになります。後方を振り向くと夕暮れの津軽平野の彼方に黒々とした岩木山の姿がはつきりと認められました。再び相見え^{あいみ}ることのない岩木山も、それを知っているかのように、寂しげに見送ってくれていると感じられました。秋風に波打ち広がる枯れ薄^{くせう}の原野を走り抜けたバスは、夕暮れせまる青森空港に無事到着しました。

いざさらば津軽の国は岩木山

弘前・黒石・五所川原

【はらだ・まさふみ／日本地質学会会員、倉敷市】

労働力を考える

武井京子

昭和三十年代、炭鉱では多くの人が働き、私の小学校の時の修学旅行は四山鉱を見学したことを思い出す。その後、爆発事故や石油・ガスへの移行で、都会への集団離職となり、中京地区の自動車関連工場へ転職された方も多い。私たちが就職先訪問で訪れた際、炭鉱からの多くの転職者がおられた。今後、トランプ大統領の関税の問題に火が付けば、車の生産労働者数は変化するかも知れないが、非正規労働の人も多く、不安定な生活を送っているらしい。

現在、我が家を手直ししている関係で、建設・建築関係の人と会うことがある。高齢の技術者が多く、家を壊した時は、六十代、七十代の男性が暑い中、よく働かれていた。家を作る時も、六十代の男性や五十代の女性なども働いておられた。時折、資材の運搬で中高年の人が来る。その人は、自分が若い時はよく働き、資格を取るための勉強にも頑張っ

たが、今の若手にはやる気が足りないような気がすると言われた。四十代で転職する人も多いらしく、家族を養うという気骨や覚悟はあるのか疑問だと話された。

仕事は多く、労働力不足だと言われているが、どの仕事も大変で、お金を得ることは簡単ではない。東南アジアも経済水準が上がり、今や日本の賃金と差がない国も出現している。それでもまだ日本に住みたい外国人も多いという。

堤未果さんの新著『日本が売られる』（幻冬舎新書）にも多くのアメリカ人が日本に住みたいと希望していると書いているが、人吉でも聞いたことがある。安全だし、テロもない、人種差別もなく、周囲の人は親切。知りあいの英語教師の女性は、このまま日本に住みたいと言っていた。堤氏は更に、健康保険の必要性をつけ加えている。日本人だつて苦労して働き税金を納めているのだから、外国人であつても保険や税金は負担すべきだろう。

人材不足は深刻だが長年、産業系学校に関わっていた私としては、産業系の教育の充実に力を入れるべきではないかと思う。卒業生が地元で頑張っているのを見ると、なおさらそう思う。

【たけい・きょうこ／人吉市】

お休みどころ通信 ④

発達症の人の就労支援

精神科医 興野康也

僕は発達症の子どもから成人・高齢者までの診療をしています。医療機関の役割としては、診断や治療が大切なのですが、発達症の人の治療は投薬だけではうまくいかないことが多いのです。実際には社会生活上の相談に乗ること（家族関係・日常生活動作・教育・進路・就労・金銭管理・恋愛・育児など）、生活しやすいように環境を整える手助けをすること、必要に応じて外部機関（教育・福祉・保健・司法・入所施設・就労関係など）と連携する

こと、福祉サービスや障害年金など社会資源を導入すること、などが大切です。その意味では、発達症の診療はソーシャルワークに近いものがあり、社会的な支援体制について学ぶことが大切です。ですので以前から発達症の人への就労支援には関心を持ってきました。

昨年この就労支援の問題について学んだり考えたりするきっかけがいくつかありました。まず1つ目は、熊本県の子ども支援の中核病院である希望ヶ丘病院の見学に行ったこ

とです。重症なケースについての豊富な治療経験があらわれ、施設面でも提供するサービスの面でもすばらしかったのですが、いちばん印象的だったのは病院長のお話でした。今後取り組みたいことは何ですかとお尋ねした時に、「就労支援です」とおっしゃったのです。診療している子どもたちが成長して社会人となると、やはり就労や生活の自立が問題になります。その支援を充実させていきたいとお考えでした。

2つ目は、ハローワークとの連携が進んだことです。人吉市にあるハローワークには大変熱心な職員さんがおられ、以前から病院に勉強に來られたり、協力して就労支援に当たったりしてきていました。その活動が実り、吉田病院とハローワー

クとで正式に協定を結び、連携して就労支援に当たれるようになったのです。これはとてもうれしいことです。そして就労支援がなかなか進みにくいケースというのは発達症が関与していることが多いので、人吉球磨地域での発達症の人たちへの就労支援にとっては大きな前進なのです。

3つ目は、梅永雄二さんの講演を聞いたことです。ジョブコーチとしてかなり重度の発達症の人たちの就

労支援に当たってこられた方で、実践経験の厚みがありました。感銘を受けたので、著書である『発達障害の人の就労支援ハンドブック』（梅永雄二著、金剛出版、2010年）を読んでみました。この本にも発達症の人たちが安定して就労できるようになるまで支援に当たられた9人の支援者（ジョブコーチ）のケースレポートがあり、支援の実際の様子がよくわかります。ジョブコーチの仕事の流れのポイントは、①本人の得意不得意をよく知る、②職場の特徴をよく知る、③本人と職場との適切な組み合わせを考える、④最初は自分が中心になって支援をする、⑤



『発達障害の人の就労支援ハンドブック』（梅永雄二著、金剛出版、2010年）。ジョブコーチの支援の様子が具体例を通して非常によくわかる

だんだん職場の人たちが

支援をできるように持っていく、の5点です。ジョブコーチという仕事の奥の深さがわかりました。

このように発達症の人たちの就労支援について学ぶ機会がいくつもあつたのですが、さらにありがたいことに2019年2月に地域の事業所の方たちに向けて講演をできることになりました。医療や福祉、保健、教育などに関わる方への講演の機会は比較的ありますが、地域の事業所の方たちに直接お話しできる機会はなかなかありません。せっかくですので講演だけでなく、グループワークなども取り入れて、実践的な学びの場を作れればと思っています。

【おきの・やすなり／人吉市】

方言を味わう ③①

稲留三郎の世界 ⑩

―年中行事二月の巻―

前田一洋



この考察はまた他日に譲るとして、次は二月十五日の「釈迦の涅槃」を読んでみよう。

○

「祖父祖母、子どもを引き連れて寺参り。ああ、南無阿弥陀南無阿弥陀。おおまあ、お前さんお子さん方、お参りなさんしたげな。今日は天氣の良かで、えーことばい。さあ、お賽銭ども上げつやい、一文でよか。おお、それでよかと一文ずつ上げて、ああ南無阿弥陀仏と皆一同に唱えて、咄をして、さあもう戻ろうや。さあうつ立て、草履や木履ども踏み替ゆるな。玄関を下りて杖ついて、よろよろして行く。子供は道草摘んで、竹やら木の棒で蛇やら墓やら、さあなし（いじめ）て追うやら、打ち投ぐるやら、

「二月朔 太郎朔 昔は午頭殿ちゅうて紙に角のをいたる肌か人形押したるを、社寺にて刷調えて多く戸毎に配りおった。是れはスサノオノミコトとも言いおった。白団子（米の粉のだんご）を拵え午頭団子と言う」

旧暦二月一日に子供たちは、「太郎づいたちにや、山やら川にや行たちゃならんばい。ヒョーヒョーちゅうて、ヤンかぶつた（髪毛が伸び放題になった）人達の、なんぶ達（大勢）

通って行きやつで。そして山やら川で遊びおれば、どけか連れてはつてきやつで。

また「庭先やら畑に鍬やら鎌ば、決してなんぎやつ（放置）てえーちゃならんばい、そんな達の持つてはつてきやつで。今から、ばばしやんが白だご作つとくで、おまいどまホツどん（祝人）かちや行たて、ゴツどんのお札よば貰うて来ない」。こんな事を聞かされた子供たちは、その一日中怖かったのだ。

喧嘩するやら、泣くやら、手入らん子供を呵つたり、欺ましかたりして、よたよた徒倚て、今戻り申したばい。早う着物を着替えさせんば、汗出穂理ばい。年取つて物忘れてどうもならん。手拭と賽銭袋杖。重箱を打ち忘れたで云々」。

孫どもを連れての寺参り、昔の年寄は信心深いものだと思いきや、意外とそうでもなさそう。子供だつて然り、いわゆる悪ガキぶりは今の子供とちつとも違わなかった。

○

「二月彼岸と言う事ア日本中古の祖師の善功なり、漢土天竺にその沙汰なし」の書出で、

「早お彼岸になった、彼岸桜も咲たばい。何々寺から墓やー参つて来

う。女も担桶え花筒入れて、荷のうて徐々行居、己も直来るでい。それじや行たて来もそう、夫じや往たて御座んしと言うて出れば、児が跡追して、己れも行くばい言うて、啼て走れば弟も泣いて走る。何と欺せども差理無理行くちゅうて、走つて行く。跡から見れば跣足イ尻撮つて、物闘争うて、喧嘩して、竹棒で打つやら擲くやら、泣くやら帰参なこと。跡から寺ア行けば、泥足で内イ上がつて騒動つく。阿羅、御前様一雙連往で於参りなさんしたぬう。阿、南無阿弥陀南無阿弥陀、祖母様最早戻うや。唯、戻る。皆様達早御帰り被成し、私共ア於先イ行居り申候。左、行きやれ、走れ、打倒すなーと言いつつ徐々歩行で、そら行け走れ喧嘩するな

ねー。祖母様誰か叫くばい。応、手拭と杖、酒と打忘れた。権且持つて来う、行逢りあ、年を取ると打忘れて動もならん。和れ共ア行逢やー言うて跡戻りして、持つて来た。今戻り申した、早う着物着替えさせんば、汗出穂理ばい。御帰り被成さんし、御早事で莫座んした。以外、於辛う莫座んしつろう」。まあ、釈迦の涅槃の寺参りと似たような微笑ましい情況が活写されています。

こうした事から推察すると、庶民の信仰行事というのは、お坊さんの有り難い説教や読経を聞くのもさることながら、一種のレクリエーションでもあったのではないのでしょうか。

【まえだ・かずひろ／人吉市】

病氣と私②

瀬戸致行

昭和20年4月から8月まで母の実家（球磨村渡）に大変お世話になった。

私達は何のお返しもせず申しわけなく思っている。

昭和20年9月頃から人吉市二日町に転居した（父の実家で現在、白いキャンパスに貸している）。

戦後の食糧事情の悪さは大変で現在も思い出したくもない。

西陵中学1年、東陵中学2年、人吉一中3年と過ごし、昭和28年3月には大学受験となった。私は学校の先生になりたかったが、父は「お前は病弱だから医者になり、医者に払った分を取り返せ」などと冗談交じりに近くの熊大医学部をすすめた。

その頃は医学部に行くのは医者の子供達の様だった。黒髪の第五高等学校の名残りが「医学進学課程」を

理学部乙と称し40名で、その内の20名近くが熊本高卒だった。八代高校から5人、女子生徒は3人だった。私は人吉一中時代に居て済々黌高校に行った三牧君宅へ二ヶ月3千円で下宿させていただいた。

昭和28年6月、熊本市は白川の大水害にみまわれた。結局食べる物もなくなり、下宿からは早く人吉に帰るよう云われても、交通の便さえなかった。

昭和30年4月から医学部に入学出来、詰襟に「M」を付けて嬉しかった。

しかし専門課程の4年間の内、3年間はお寺の一室に下宿させていただいたが、寒いすき間風に悩まされ、1年2年3年の3年間は夜間、とくに寝れない程で、結局、3年続けて肺炎になり、母が看病に来たり、人吉市へ帰り学校を休んだ。

その時は精神的にまいってしまい、自分は早死にするのではと悩んだ。

これを知り、母はお寺にお参りすることをすすめ、熊本市京町の仏厳寺の高千穂和上様とお会いすることとなり、後から高千穂正文先生のお話も聴聞した。

大学はどうか卒業し医師になることが出来た。

しかし入局は忙しい産婦人科より楽な科思ったが、加来道隆教授の臨床講義に魅せられて、産婦人科を専攻した。

一方、私は大学院進学するが、それは見栄から。私が3年前27歳、順子が21歳で婚約していて、順子のお父上（亀先生）の希望があり大学院生活4年間を送ることになった。

昭和38年、私が29歳、順子は大学卒で、薬剤師となり、熊本市内のアパートに畳部屋2間、風呂もない家で新婚生活となった。

熊本での転居は国立病院勤務医時代を含め最後の市立産院長宿舎の一部まで4〜5回に及び、そこから宗島



シブドクターの頃

丸（アフリカ航路）ヘシブドクター医として乗船し、インド洋3週間は「産婦人科医のつわり体験記」として吐いてばかりで苦しんだ。

帰途はこの「つわり」は完治していた。

昭和46年、人吉総合病院勤務を3年間で辞め、38歳のとき西間上町に開業した。

しかし、余りの忙しき、危険なこと。男は私一人の為雑用をなんでもこなさなければならず、開業3年目で「何故、自分は開業したのだ」と後悔ばかりであった。

患者さん達が危険になると、自分は命を絶ちたいと思った事もあった。これを止めさせたのは順子、母、義父、義母達だった。感謝している。

あるときは人間ドッグで大腸癌が見つかり、1年間ほどは宮医大の助力で、先生に来ていただき、それを乗り切れた。

この時は閉業しようかと思ったが、従業員の方々の希望に81歳（平成27年3月）まで細々と外来診療を続けた。そして、今度の脳溢血である。

雄行の家族も進学を迎え、雄飛の家族はまだ幼い子供がいるのに、私の不養生からこんな事になるとは。それも親友、鳥飼和彦君と同じ病氣とは……。

【せと・ちこう／人吉市】

奥球磨、湯前町の偉人

那須良輔と北御門二郎 ②

村木正則

一、風刺漫画の巨匠・那須良輔 ①

召集令状は公平に配達されるものと思ひ国のために戦うものだと思ひていたが、政府高官の子弟は徴兵逃れができたことを知った。「政府はあくまで俺を殺すつもりなのか、俺は絶対に死なないぞ、石にかじりついても生きのびてみせる」。良さんが戦後政治漫画で活躍する鋭い風刺の原動力はこの戦争体験における権力者の横暴と利己主義である。そこで良さんは自分の使命は権力監視、権力批判そして民衆に風刺を武器に政治を分かり易く伝えることと肝に銘じている。

良さんの戦後の活躍はめざましく、昭和二年に熊本日日新聞に子ども向け漫画を連載、昭和四年には漫画家の先輩の横山隆一さんの推薦で毎日新聞の政治漫画（風刺）の担当となる。戦後政治漫画では朝日新聞の清水崑さん、読売新聞

の近藤日出造さん、毎日新聞の良さんは政治漫画界の三傑と言われたが、良さんは日本を代表する政治漫画家の一人となった。また三人はライバルでもあり飲み仲間でもあり、銀座でよく酒を酌み交わした。さらに昭和二十七年には「週刊東洋経済」に政治漫画、随筆等を連載した。良さんの名声は全国に広まった。昭和二十九年一月、日本航空の東京―ロスアンゼルス線開設の際、文化人代表として招待を受け渡米している。昭和三十一年九月には第三次文化使節団として草野平心さん等と中国を訪問している。

昭和三年にはロンドンで開かれた国際漫画家展に出品し国際的にも高い評価を得る。昭和三十九年七月には日ソ文化交流の一端として、作家の壇一雄さんらと釣り使節団を組み訪ソ。昭和六十二年日本漫画家協会選考委員特別賞を、そして昭和六三年には勲四等瑞宝章を受章している。

良さんの交友関係は広い。その中に著名な文化人が多いことに驚く。それは良さんが似顔絵の達人であったこと、また趣味として釣りやゴルフやお酒が好きだったことと関係が深いと思われる。しかしそれ以上に性格として明朗活発で人情に厚く、多くの友人が良さんの周りに集まってきたと思われる。つまり良さんは人間としての魅力に溢れていたのではない

かと想像する。その中でも特に作家の里見弴先生や評論家の小林秀雄さん、漫画家の横山隆一さんとは、飲み仲間、釣り仲間、ゴルフ仲間であつた。良さんは欠かさず顔を出している。良さんは仲間であつた。良さんは欠かさず顔を尊敬し、親しく交友していた。良さんの著した「わが酒中交遊記」（講談社）に友人二八人が紹介されているが、その中で筆頭は里見弴先生であり、唯一里見さんには先生を付けて表記していることで良さんの気持ちが表れている。本文でもできるだけ良さんの気持ちに沿った呼称を用いることにしている。良さんは里見家集まる多くの文化人とも交流している。

また、那須高原（那珂の庄村）に良さんの別荘があつた関係で仲間の里見先生、横山隆一さん、加藤芳郎さん、作家の海音寺潮五郎さん、将棋の大山康晴さん等とは那須高原の山荘仲間であつた。里見先生が良さんに「那須君、君は名前も那須だし最初にここを開拓したのだから『那珂の庄村』の村長になつてくれ」と指名されている。また良さんは怒りっぽいところがあつたので、仲間からそんな時「那須火山」と揶揄された。良さんは仲間の横山隆一さんや清水崑さん等が鎌倉に住んでいるのが羨ましくて良さんも昭和二五年に東京（平

河町）から鎌倉に引越することにした。転居先の鎌倉の新居は偶然であるが評論家の小林秀雄さんが前住人であつた住居であつた。良さんは鎌倉においても鎌倉の文化人と親しく交友した。

一八八九年（明治二年）、横須賀線が開通して東京との距離が近くなり、静かな環境を求めて鎌倉に引越する文化人が多く鎌倉文士と呼ばれた。あるとき里見先生八〇歳、大佛二郎さん七〇歳の誕生のお祝に鎌倉の小学校の校庭を借りて野球の親善試合をしたことがあつた。その際多くの鎌倉文士が集まつた。試合は大佛軍が勝つたが応援団には小説家の有島武郎さんの弟の有島生馬さん、作家の川端康成さん、林房雄さん、近日出海さん、石川達三さん、将棋の大山康晴さんのほか里見先生、大佛さんはもちろん、良さんもその一員であつたが豪華な顔ぶれである。また、良さんは小林秀雄さん、今日出海さんと家族とともに毎年湯布院（大分）等へ行く旅行仲間でもあつた。良さんは昭和四五年六月には里見先生と小林さんのおふたりを球磨川の鮎と一緒に食べるために、人吉へ案内したことがあつた。

その際話題として皇居の新宮殿が完成したあとだったこともあり、小林さんから新宮殿の建築には市房杉が使われている

るらしいという話があった。そこで急遽市房杉を見るために市房山へ行くことになった。三人は市房山へ行くためにその登山口である湯山へ向かった。その時良さんはふと友人のジロしゃん（北御門二郎さん）のことを思い出し杉を見る前に、二郎さんの湯山の家を訪ねることを提案し皆も同意した。湯山の二郎さん宅ではみんなでお茶を飲んだ。二郎さんが里見先生、小林さんに直接会ったのはこの日が初めてであった。良さんは四人が市房山に向かい目的地に着き参道に腰を下ろして持参の弁当を頂いたのは楽しい思い出になったと記している。

政治漫画で活躍した良さんの画風はどれも写実を越えて活き活きしており、動画の一部のようなまた今にも音声が聞こえてきそうな動感がある。それは人物や小動物に限らず共通している。「日本美術年鑑」（平成二年版）によると良さんについて「洋画修学を基礎とした巧みな似顔絵を用いて動感ある発刺たる画風に鋭い批判風刺をこめた。」と記録している。さらに良さんが昭和三年に出版した随筆集の序文に友人の作家大佛次郎氏は次のように良さんを評している。「那須君は不思議な人だと思っている。漫画の方はもとより表芸だが、時たま見せてくれる随筆や文章が尋常のものではない。那須君は血の気が多くて有名なおこりん坊だが、人間の不正を許さぬ痛

烈な精神が漫画の皮肉嘲弄になって現れ、随筆文章の方は極めて楽天的で情愛に溢れ精彩を放っている」と述べている。これは良さんの全ての作品に共通しているのではないだろうか。

三、生粋のトルストイアン、北御門二郎④

北御門二郎（以下二郎さんと略す、一九三―二〇〇四）は湯前町上染田生まれである。北御門の苗字は地域では違和感があるが、元々は祖父の北御門龍太郎さんが久留米藩の士族であった。地域での政争が激しく身辺の危険を感じて地域を離れる決意をした。久留米の土地などを処分して移住してきた安住の地が湯前であった。湯前では水田約二〇ヘクタールの地主になるとともに呉服を中心とする商店を経営した、呉服が主であるが塩、砂糖、雑貨も扱ったので今でいえばスーパーである。祖母塩見ハマは柳川藩主に使えた信仰深い（ギリシャ正教）医者の娘であった。二郎さんは幼少期から思春期まで最も内面的な影響をうけ、私が出会った中で最高に徳の高い女性が祖母であったと述べている。教育熱心で教育ママであった母の薦めで二郎さんは二歳のとき兄と共に熊本中学（現熊本高校）に転校した。【むらき・まさのり／川崎市】

せきれい 鵲鴿短歌会

一月詠草

封を切れば婚約したと孫娘幼き頃をしのびつつ読む
神前に朝陽を浴びて幼児はもみじ手合わせ柏手を打つ

守永 和久

青き島神々の社に陽は昇り平成最後の元旦は晴れ
南国の大海原は波静か太陽の道を渡る釣船

河内 徹夫

八十路越へ七草粥を食みながら夫と語るは四季の情景
時折りに画面に映る名勝地夫と地図見て旅跡たどる

中村美喜子

迎春は目出度く歳を重ねども未来の意欲何故か湧き出ぬ
老耄の漠たる心晴れやまず新春迎えど為す術見えず

西 武喜

足、頑健やかならぬ吾が身体八十路越へるはハードル高し
降り際淋しい顔で「おばあちゃん」吾を氣遣ふ孫の愛しさ

釜田 操

街路樹は春は青葉に秋もみじ冬は枯れ果て相良路侘し
平成の終りの元旦娘と二人言葉少なくおせちをつつく

三原 光代

行く秋に瀬音聞きつつひと時を熱き想いに心巡らす
鈴なりの柿は夕陽に照り映えて鄙の夕暮れ採る人もなし

橋詰 了一

妻に言ふ「毎日毎夜デートだね」妻は微笑み私を見つむ
五十余年振りかへ見れば謡のごと「夢まぼろし」が心に沁みる

堀田 英雄

字図で見る球磨の地名 ② 上村重次

千原（チワラ）

— 深田村・須恵村 —

深田村と須恵村の村域の大半は球磨川右岸にあるが、北端の一部が左岸にあり石坂堰を境にして上流側が須恵村字千原、下流側が深田村字千原である。

『日本地名索引』にはチワラ、チハラ地名が十九件あり、大多数は千原と書くが、地原、置原、路原、茅原などの表記例もある。熊本県内の字名では熊本市旧島崎村の千原田（チハラタ）、千原々（チワラハル）、阿蘇郡白水村白川字千原（チ

ワラ）、上千原（カミチワラ）、下千原（シモチワラ）があり、熊本市の千原は千原桜（チワラザクラ）で有名。

歴史的な千原地名では下益城郡城南町に千原村があった。『日本歴史地名大系44・熊本県の地名』によると、正和二年（1313）の文書（大友家文書録）に「隈牟田庄千原村田畠在家等事」とあるのが初見である。緑川左岸の平野部で、西は善町（メドマチ）村と接し、明治九年に千原・善町の両村が合併し、千町村となり、その後杉上村を経て現在は城南町大字千原になっている。

【おことわり】本連載は平成6年から9年にかけて執筆されたものの復刻版で、合併前の町村名をそのまま使用しています。

このように千原は全国区型の古い地名であるが、その意味については定説がないようである。『和名抄』の球磨郡六郷の中に千脱郷があり、『日本地理志料』は「世無多伊（せむたい）」と訓じ、川内川水源の白髪岳麓の上村・免田町付近を比定している。『日本歴史地名大系44・熊本県の地名』は『日本地理志料』の説を紹介するに止めながらも、訓は千脱郷（ちぬきこう）としている。〃千〃をセンと読むのかチとするのか定説はないわけで、まして千原の〃千〃と千脱郷の〃千〃は結びつきそうにない。

地名の意味がわからない場合は字図をみると命名意図の字がかりが

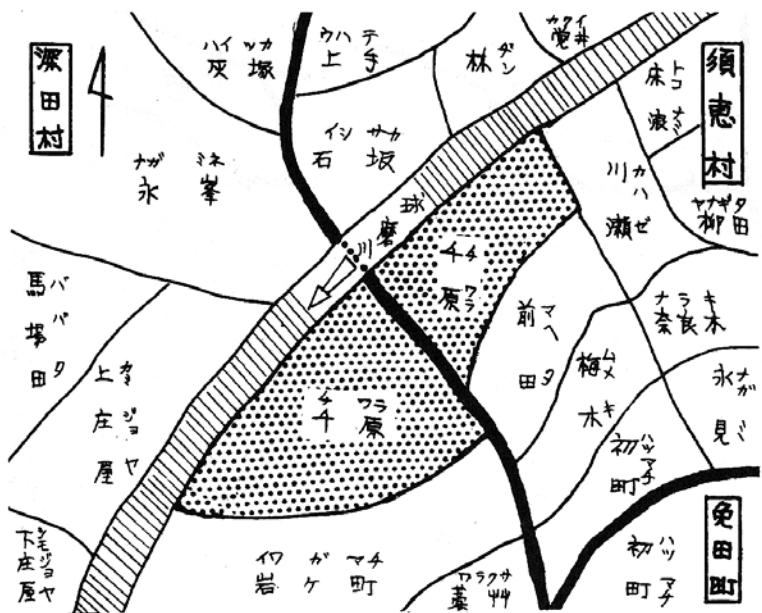
つかめる例が多い。字名は土地区域の名称であって、字限図とか字界図とも呼ばれる。仕切

られた区画にどんな名称（字名）があるのか、隣接字名は何と呼ばれるのか、を知ることによって地名のネーミング意図が浮き彫りにされてくるのである。

ある。とくに須恵村・深田村の千原は境界を分け合っていて、千原地名が境界地名であることを明瞭に示している。

境界にあつてチワラと呼ばれるのにふさわしい地名表記としては茅原（チワラ）が考えられる。長野県茅野市（チノシ）の茅野は古くは千野とも書かれた。カヤ（茅・萱）の生える地が茅原、茅野であり、そこには共有・入会地であった。球磨川の川原に茅原があつて両村の茅刈場だったのが千原のルーツだろう。

【うえむら・しげじ／宇土市生まれ、元熊本日日新聞社記者】



さきにあげた熊本県内の字名にみられる千原地名はすべてムラ境に位置する。山間地もあれば台地、川沿い平地もあつて地形にちなむ名称でないことは明白で

大藤時彦「エンブリー」著『須恵村』を紹介す

須恵村 Syue Mura: A Japanese Village, by John F. Embree, The University of Chicago Press, Chicago, 1939

本書は、著者エンブリー氏夫妻が一九三五年八月から一九三六年十二月に至る約一年半に亘って、熊本県球磨郡須恵村に滞在して調査した野外作業の報告書である。丁度その頃、木曜会の山村調査でも最上孝敬氏が同郡神瀬村を調査に行つてエンブリー氏に遭遇し、氏は又帰国前に木曜会の例会に出席したりしたので我々にとって本書の刊行は特に探い興味を覚えしめる。従来外国人が我が国の村落を調査したものは皆無ではないが、この書物の様に計画だつた実地調査は少なく、全く画期的な報告と思われるので、すこし詳細に紹介してみたい。

まず、本書が如何なる意図の下に編まれたかを述べる必要がある。それには幸いに Badcliffe Brown の序文が良くそれを伝えているのでここに引用すると、社会人類学の名で呼ばれている学問、即ち人間社会の形式に関する比較研究に対して資料を提供することが本書の主目的であつた。社会人類学は本来、原始的な野蛮もしくは未開と目すべき単純な社会を考察の対象とすべきで、進歩した社会に対して史学者、経済学者、社会学者の手に委ねべきであるとの見解が従来行われていた。事実十五、六年前までは社会人類学の対象は世界中の文字なき民族の研究に限られていた。しかるに近年に至つてシカゴ大学やハーバード大学の社会学者 Fay-Cooper Cole, Redfield, W. Lloyd Warner などの諸教授はシチリー、メキシコ、マサチューセツツ、ミシシッピ、アイルランド、ケベックに

於ける社会生活について重要な野外研究を遂行した。そして一九三五年にはその調査の歩をアジアの文明諸国に進めることになった。エンブリー氏の日本村落調査もかかる仕事に関連する一つとして行われたのである。

社会学者の研究は社会制度の本質を探究せんとする人々が十七、八世紀に未開人についての報告に注意し始めたに発し、十九世紀の後半に至つてしばらく一つの学問として成長し、この名を唱えたのは近々五、六十年前のことに過ぎない。それが今世紀の初頭に至ると社会生活の組織的観察は、味吟されるべき仮説と解説さるべき問題とを脳裡に蔵す熟練なる調査者によつて行わねばならぬことが認められて来た。野外作業の必要がかくて強調されたのである。社会人類学は人間社会並びにその制度について有数にして意義ある概括化を行うを目的としている。この目的を達する唯一の方法は多くの異なる型式の社会を多数比較研究するにある。未開人の比較的簡単な社会は種々な理由から社会人類学者にとって極めて重要であるが、その比較研究は吾人に知られている限りの人間社会の全領域に向けられねばならない。社会人類学

にとつて要求されているものは、ある社会構造内に個々の男、女、子供がいかに生活しているかの知識である。各個人の日常生活と相互の行動のうちにのみ社会制度の器能は直接に観察されるのである。従つて全生活が限なく見聞される程度の広がりを持つ共同社会の数ヶ月にわたる直接研究が最も重要となつてくる。エンブリー氏の研究は大部前置きを長く述べたが、かかる見地に立つて行われたものである。そこで氏の報告を紹介するのだが、その前に彼がどういう手順で調査を始めたかを述べておきたい。

エンブリー氏は渡日後、調査村として推薦された約二十一ヶ村を歴訪した後、最後に須恵村を選定した。その理由は第一に村が比較的小さく、二人の手で調査するに便利だつたこと。第二にはこの村が日本の村落中、特に他と異っていることなく普通の村であつたこと。大都会に接近せず、またいわゆる更生村でもない。米作村であり、極度に富んだでもなく、貧しくもない。第三に要塞地帯と隔絶していること、これは外国人の調査としての考慮から。第四に個人的な便宜が得られたこと、村に

於ける好意や協力者のあったことである。

本書の内容はこれを八章に割っている。即ち、(一) 歴史的背景、(二) 村の組織、(三) 家族と世帯、(四) 共同慣行、(五) 社会組織の変遷である。全般にわたって細く内容を紹介する紙幅の余裕がないので他の機会にゆずり、各章毎に気付いた点のみをあげておくに留める。一、二章については特記することもない。第三章「家族と世帯」では養子について注意している。この村では養子が多く、とくに弟養子が盛んである。男子間の同年者には強固な結合が見られるが、女子の方は婚姻が多く、部落外もしくは村外婚なので幼少よりの結合を永續することを許されない。日常生活については男女間の仕事の分担に留意してある。宴会集会の説明に民謡の歌詞を若干翻訳している。この村で面白いのは人の送迎に三味線入りで賑やかにすることで入営の時にも同様にするという。

第四章では共同慣行として五形式をあげている。(一) 交替に責任をとる組、(二) 公役としての共同作業、(三) 建築、事故、葬式に見られる手伝いと加勢、(四) 労力の交換としてのカッター、(五) 講の五つである。組は三

軒もしくは五軒から成って、部落の各戸の名前を記した番帳を責任をとった組が保管している。組は薬師を祀っている部落なら薬師堂を寄り合い場として薬師の縁日に集合する。この組の組織の下に見られるものに伊勢講があり、馬の血刺がある。組の組織なくして全部落員が番帳の記名順に責任をとるものに葬式の手伝いと水害に備えた部落所有の小舟の保管がある。第六章、人の一生中では婚姻に三日カセイというのがある。式を挙げずに娘と両親と親戚と時には仲人主婦が婿の家に行き、三日たつと嫁は里に帰る。その後、男の方で気に入れば正式に披露するのとあり、いわゆる試験婚としているが、「婚姻習俗語彙」の例と対照して見ると、にわかに断定出来ない。葬式においては、この村に毛坊主があり、これを司るというのは貴重な新資料である。

第七章宗教の中に年中行事が述べてあり、かつて『民族』に紹介されたシンナメジョのことが写真入りで説明してある。この村では田植えを犬の日に開始する風俗があるいわれとして、長門向津具の犬のホカケとて麦の穂掛けを弘法に付会している物語が同様に米と弘法について語

られている。最後の章は総括として村の近代化に基づく社会組織の変遷が述べられている。これは簡潔によく本邦村落の変遷過程を見ている。書中に収められた写真や挿図、図表なども内容の理解を助け記述法として我々の参考になる点が多い。ただ我々にとつては説明を必要としない事項に頁数を費やしており二、三、日本語の記述に疑問と思われる点もあるが、日本語を十分解せないでこれだけの調査を成し遂げたのは偉とすべきである。エンブリー氏が日本を訪れた頃から日本社会の野外作業も急激に盛んになったので、この方面の文献が少いことを告げているのは外国文になったものより利用出来ない人に

とつては殊に不自由を感じたと思われる。それにしても巻末の参考文献は不十分である。

本書を通読して何よりも深く感じられたことは著者の態度に何らの先入観なく、外国人に往々見受けられる色濃き主観性の露呈が全然ないことである。本文をあくまで事実の記載をもつてし、レビラットとかテクノニミイとかの術語は索引中のみあげてある。全般を通じてフオタロアの立場から見ると、伝承的なものと極く近代的なものに対する省察が欠如して等しなみに取扱われている傾向があるが、これは氏の立場から言えば大した非難に値しないかも知れない。

《解説》

エンブリーの『須恵村』の研究は同書出版直後からはじまった。田中一彦

—90年—の書評が日本での同書研究のはじまりのようである。そのとき、大藤は38歳。

『日本を愛した人類学者』(忘洋社

高田素次(1912—1993年)

2018年) 49頁によれば、1940年(昭和15年) 9月発行の「民間伝承」(第五巻12号) での大藤時彦(1902

は、大藤の書評を読み、彼の主宰する郷土雑誌「球磨」への同書評の転載を大藤に申し入れた。その日付は不明だ

が、大藤は、同年12月8日付葉書で「御葉書拝見 拙文御転載下さる由、小生に於いては何らの異存も御座いませぬ。別封にて、二三誤植をなほし、会報送つて置きました。つまらないものですが、宜しければご自由に。」と返事した。そこでいう「会報」は書評掲載の「民

我們提倡使用「一個切」和「兩項對照組合」的二行俳句書寫

世界に二行書きによる「切れ」と「取り合わせ」を取り入れた Haiku を提案する

吳衛峰

●
窗外飛雪
唇齒間融化的巧克力
〔永田満徳評論〕

以「飛雪」與「巧克力」的兩項對照組合，讓外頭的冰冷氣候與口中融化的甜蜜形成對比。如此紀錄了寒冬的一個情景。

吳衛峰

●
窓外の吹雪
唇と齒の間に溶けるチョコレート
〔永田満徳評〕

「吹雪」と「チョコレート」との取り合わせで、外の凍るような寒さと口の中にとろける甘さとの対比が素晴らしい。寒い日の一場面をうまく切り取っている。

離畢華

●
秋月清暉
漆成白色的房子
〔永田満徳評論〕

或許描述滿月的清輝。明亮的月光使白色的建築物更顯得突出。這是寫生俳句的最佳榜樣，描寫了一幕綺麗的夜景。

離畢華

●
秋の月明り
白いペンキ塗りの屋敷
〔永田満徳評〕

満月の「月明り」であろう。明るい月の光でなお一層白い建物が印象鮮明に浮かび上がってくる。写生句の見本のような句で、美しい夜景が描き出されている。

林國亮

●
以手掌溫酒的驛亭
小雪花
〔永田満徳評論〕

在一個雪花紛飛的車站裡，作者設法以手掌溫酒並飲用。引起讀者共鳴的是因為寒冷，所以想喝酒來取暖的共同體驗。

林國亮

●
駅舎にて手のひらで温める酒
小雪花
〔永田満徳評〕

小雪の舞う寒い駅で、少しでも掌で暖かくして酒を飲もうとしている場面。寒いからこそ、酒を飲んで体を温めたいという気持ちは共感できる。

【ながた・みつりの／俳人協会会員、熊本市】

間伝承」の該当号のことで、「誤植」の箇所がどこなのか問題になるが、大幅な直しではなかったようである。大藤に転載許可を申し込むさいに「民間伝承」の主催者である柳田國男（1875—1962年）に高田がなんらかの連絡をしたかは確認できないが、田中一彦が指摘しているように、高田が柳田と親交があったことが、大藤に転載許可を申し入れたことの前提であったことはまちがいない。そのとき高田は28歳であった。大藤と面識はなかった。

高田は、直ちに、転載準備に入ったが、大藤をどのように紹介すべきか判断できず、大藤にその旨の質問の手紙を出している。大藤は「小生紹介御必要なら『国際文化振興会勤務』とでもして置いて頂きます」と、昭和16年1月11日付消印の葉書で回答している。以上の「球磨」（133号）（1941年 昭和

和16年2月）に大藤の書評は転載された。エンブリー『須恵村』は1939年（昭和14年）10月である。大藤は同書発行から1年を経ずして書評を書き、高田もその書評を1年4ヶ月後には球磨地方を中心にする「球磨」の読者に紹介したことになる。

以上については、高田素次「白麓山房雜記（16）」（くまもとフォーラム）1989年1月号）を参考にした。

★大藤時彦 早稲田大学文学部中退（大正12年）。昭和8年、柳田國男の「民間伝承の会」（24年日本民俗学会）同人となる。博物館の運営する大橋図書館、国際文化振興会勤務を経て、34年に成城大学教授。民俗学会では代表も努めた。1973年定年退官。民俗学のほか、日本語学の権威でもある。戦後、関敬吾・桜田勝徳などの民俗学者と

もに、連合国軍最高司令官総司令部の幕僚部の民間情報教育局（CIE）のメンバーになっているが、これについては別の機会に触れる。

★大藤は書評冒頭でエンブリー『須恵村』に注目した理由を説明している。そのひとつとして、最上孝敬（1899—1983年）が、木曜会の一員として、神瀬村（現在の球磨村の一部）を調査し、エンブリーの許へ訪問する機会があったことを上げている。その調査は、日本学術振興会の助成を受けて1934年度から3年間実施した調査のひとつで、100項目の調査票（『採集手帳』）を使つての調査であった点に特徴がある。「村が一個の有機体として、命長く生きて来た生理を明らかにしよう」を課題にしたもの。最上の調査報告の内容を確認すべきだろう。（春秋）

問1 熊本県内でダムカードを発行しているダム名をあげよ (例: 荒瀬ダム)

- ① ()
- ② ()
- ③ ()
- ④ ()
- ⑤ ()

問2 エンブリーについての以下の文章は正しいか誤っているか。正しい場合は○を、誤っている場合は×をつけよ (例: エンブリーには娘と息子がいた ○)

- ① エンブリーは『日本』という著作を出版している
- ② 須恵村は、現在では、あさぎり町の一部である
- ③ エンブリーは民俗学者・柳田國男と面識がなかった
- ④ エンブリー・『須恵村』の翻訳作業は戦前から始まっている
- ⑤ エンブリーの『須恵村』は「よばい」に触れていない
- ⑥ エラは日本語を理解できなかったが、ジョンは理解できた
- ⑦ エンブリーは『須恵村』で「はじあい・ハジアイ」という言葉を使用している
- ⑧ エンブリーは記録用に「須恵村」の写真を多数とった
- ⑨ エンブリーは政治的配慮から『須恵村』で国防婦人会に触れなかった
- ⑩ エンブリーは自動車を利用して「須恵村」以外の場所も調査した

問3 八代市に隣接する市町村名をあげよ (例: 五木村)

- ① ()
- ② ()
- ③ ()
- ④ ()
- ⑤ ()

問4 明治以前に使用された元号名をあげよ (例: 大化)

- ① ()
- ② ()
- ③ ()
- ④ ()
- ⑤ ()
- ⑥ ()
- ⑦ ()
- ⑧ ()

- ⑨ ()
- ⑩ ()

問5 那須良輔の人物画の対象者の名前を書け (例: 吉田茂)

- ① ()
- ② ()
- ③ ()
- ④ ()
- ⑤ ()
- ⑥ ()
- ⑦ ()
- ⑧ ()
- ⑨ ()
- ⑩ ()

※答え合わせは次号でおこないます。前回の答え合わせは84頁で。

くまがわ春秋歌壇

いもこ短歌会

人生の幕降ろしするその日まで戦の火種消しまわりたし
この国の良きものすべてぶち壊す妄想まみれのアベの暴走

柳原 三男

里山の山眠る色ふんわりと母かけてくれし毛布に似たり
人々に嫌われきたりしはぜの木よ汝が紅葉のひとときわさえて

坂本 ケイ

麻痺の脚引きずり道を歩みゆく社会復帰ひたすら願いて
この夏に曾孫生まれると聞きしより抱く日思いて麻痺の手摩る

上田 廸子

朝霧に鹿三頭の迷い足 道凍てつくも春遠からじ
あり合わせ有るもの煮込みし鍋なれど主役気取りの白菜旨し

宮川しのぶ

「アベ政治を許さない」そはわが想い毅然と語りぬ澤地久枝は
このポスターアベさんきつと見ているはず不支持自覚し尻尾巻くわよ

上田 精一

※澤地久枝さんのインタビュー記事より

前号【くまがわ学習塾②⑤の答え】

問1 オリンピックでマラソン大会に出場したことのある日本人ランナーを10人あげよ
(例: 金栗四三)

- ① 円谷幸吉 (東京オリンピック銅メダル)
- ② 君原健二 (メキシコオリンピック銀メダル)
- ③ 森下広一 (バルセロナオリンピック銀メダル)
- ④ 高橋尚子 (シドニーオリンピック金メダル)
- ⑤ 野口みずき (アテネオリンピック金メダル)
- ⑥ 有森裕子 (バルセロナオリンピック銀メダル、アトランタオリンピック銅メダル)
- ⑦ 宗猛 (ロサンゼルスオリンピック4位)
- ⑧ 瀬古利彦 (同 14位)
- ⑨ 宗 茂 (同 17位)
- ⑩ 増田明美 (同 途中棄権)

問2 細川藩筆頭家老・松井家の当主の名を5人あげよ (例: 松井康之)

- ① 興長 (おきなが)
- ② 寄之 (よりゆき)
- ③ 直之 (なおゆき)
- ④ 寿之 (ひさゆき)
- ⑤ 豊之 (とよゆき)

問3 次の漢字の読み方を書け 例: 河童 (かっぱ)

- ① 破落戸 (ゴロツキ)
- ② 兄姉 (ケイシ)
- ③ 嫂 (アニヨメ)
- ④ 敵役 (カタキヤク、テキヤク)
- ⑤ 主持 (シュジ、シュウモチ)

問4 以下の文章は正しいか誤っているか。正しい場合は○を、誤っている場合は×をつけよ (例: 「熊本県の魚」は車エビである。○)

- ① 熊本県民手帳のほかに、熊本市民手帳、八代市民手帳、人吉市民手帳などの自治体ごとに手帳がある ×
- ② 鹿児島県民手帳は赤と黒の2種ある ○
- ③ 八代市民手帳には誤植があった ×
- ④ 大分県民手帳は「平成31年」の箇所を「2019年」のラベルを貼って訂正した ○
- ⑤ 人吉市民手帳と水俣市民手帳は同じ価格である ×
- ⑥ 熊本県民手帳は、全国都道府県手帳のベスト5に選ばれている ×
- ⑦ 佐賀県民手帳は、大型版と小型版の2種類がある ○
- ⑧ 人吉市民手帳はコンビニで購入できる ×
- ⑨ 水俣市民手帳は水俣市民以外には購入できない ×
- ⑩ 熊本県民手帳は、「熊本県の歌」として「おてもやん」を紹介している ○
- ⑪ 県民手帳は熊日新聞社が発行している ×

問5 次の写真の名前を書け (ヒント: 本誌33号)

- ① (親子水車)
- ② (義陽の首塚)

新聞の価格

白城松男

読売新聞、朝日新聞、毎日新聞、産経新聞の四紙を全国紙といい。西日本新聞などをブロック紙、熊日新聞や人吉新聞は地方紙というが、読者はそれぞれ必要性にしたがって購読紙を選択すればいいのであって、この区分に、なんらかの積極的な意味があるわけではない。読売新聞などの全国紙は国際問題や全国的問題に力をそそぎ、

そのかぎりでは有益だが、地域問題は弱いのに対して、地方紙はその逆の傾向にあるとひとまずはいえるかもしれないが、その程度の違いがあるにとどまる。読売新聞が高級というわけではなく人吉新聞が低級というわけでは決していない。以前、安倍晋三首相は、自己

の憲法論については読売新聞で述べたので読売を読んで欲しいと語ったことがある。しかし、球磨川流域で読売新聞を購読している人がどれだけいるだろうか。同新聞を読まなければ首相の見解が分からないというのであれば、球磨川流域のほとんどの人は首相の見解を知らないままでいるほかない。

地方の人間は、地元の情報を知るために、多くの場合、地方紙を購読している。国際問題・全国的課題に無関心だからではなくて、ひとまずは地元の状態を知りたいとの欲求があるからである。全国紙も各種あって、読売新聞を直ぐに購読するというわけにはいかない。

読売新聞と論調が類似しているにもかかわらず、産経新聞の場合は、コンビニでも簡単には入手できず、ほとんど読む機会がない。同新聞のバラ売りの1部価格を知っている人は、どれだけのいるだろうか。同紙の悪口を言うつもりはまったくない。同情するつもりもない。新聞は多様に存在する方がいいにきまつている。同紙に接する機会が存在する機会がじつさいにあるかに問題はあろう。新八代駅でときどき各種の新聞を購入するが、読売新聞が1部150円、産経新聞が1部110円である。価格的には、産経新聞は読売新聞に比べて40円安く、読売新聞よりも売れそうに見えるが、じつさいにはそうではない。110円という価格はスポーツ紙より安い。それにもかかわらず売れずにいることが少なくない。ついながら朝日新聞は150円、毎日新聞は140円。熊日新聞は140円。

いちばん高いのは日経新聞で180円。ブロック紙の西日本新聞は140円である。

経済専門紙である日経新聞を別にすれば、各新聞の価格の差はどこにあるのだろうか。各新聞は、編集方針とともに、販売戦略をもっている。そこに価格差が発生する要因があるようにもみえるが、最終的には、紙面の内容であろう。価格競争で優位にもかかわらず（読売よりも40円安いという魅力にもかかわらず）、販売部数が伸びないのはその内容・編集方針が支持されていないからであろう。読売と同一方向の論調の新聞であるとはいえ、読売ほどに産経は懐が深くなく、論調が単純すぎる。そこに原因があるようにみえてしかたない。全国紙での40円の差は大きい。その差が産経の財政基盤を弱め内容を薄め、それ原因になって、更に紙面の魅力を失わせ、読者を減少

させると悪循環に落ちいつているようにみえて仕方がない。基礎体力の違いは紙面に確実にあらわれる。

そういうことを考えていたら、産経新聞購読者のおばちゃんに会った。同紙の読者懇談会が熊本市内であるので、それに参加するというのだ。なか同紙に申したいことがあるということであった。なにを申したいのかはうかがわなかったが、同紙を読み込んでいらつしやるのであろう、着物姿のおばちゃんの顔は凛としていた。バラ売り価格110円の新聞の購読者はとうていみえなかった。少なくとも1部500円の競馬新聞を必死の形相でくりかえし読み、赤や青のボールペンで線を引いている初老の男性よりはるかに上品であった。産経新聞と5倍の価格差のある新聞（競馬新聞を新聞のひとつにあげていいかという問題はあるが）を真剣に読んでいるからといってそ

の男の人生が豊かだとは限らない。同じことは日経新聞についてもあてはまる。同紙を読めば経済に強くなり、昇進に有利に働くわけではない。本物の知識は、長い時間をかけて身につけていくしかない。

それにしても紙価格の高騰など新聞各社にとって厳しい状況になった。産経新聞は、今後どうするのであろうか。110円の価格をそのまま維持するだろうか。いま、それに注目している。

先月号の本誌「くまがわ春秋」の編集後記を読むと、本誌も紙価格の高騰に苦しんでいるようである。本誌は、郵送料と税金を込みにして、500円で購読者に送っている。これは相当に厳しい。誌面を充実させるためには値上げすべきと考えるが、同誌はどう考えているのだろうか。気になるところである。

【しろき・まつお／八代市】

「郷土」37号を発刊

求麻郷土研究会の機関誌

人吉・球磨の郷土史や文化財の調査研究を続けている求麻郷土研究会（尾方保之会長）は、機関誌「郷土」の平成30年度版、通算第37号（A4版62頁）を発刊した。掲載内容は「球磨産の鉄鉱石で製鉄実験」（宮戸大）、「相良清兵衛隠居所の復原」（北川賢次郎）、「宝永元年



「郷土」37号の表紙
表紙写真は「球磨の山々」

『利根川・荒川俊御普請手伝いに付…』人吉藩の借金と返済計画及び江戸経費節減計画（尾方保之）などの会員研究を収録している。

後半はこの2年間の例会での調査報告となっており、報告内容は以下の9つ。

- ▽人吉市鬼木、北願成寺町周辺文化財見学（平成29年2月）
 - ▽人吉街道を歩くに参加（平成29年3月）
 - ▽人吉市内西南戦争戦跡めぐり（平成29年4月）
 - ▽水上村湯山地区文化財見学（平成29年5月）
 - ▽山江村山田地区文化財見学（平成29年7月）
 - ▽あさぎり町深田地区文化財見学（平成19年10月）
 - ▽五木村南部地区文化財見学（平成29年12月）
 - ▽豊野町・小川町・八代市の文化財見学（平成30年4月）
- また今号には、これまで発行した「郷土」の第18号（平成2年）から36号（平成28年）までの総目録が掲載されており、同会の活動を振り返る貴重な記録となっている。同誌は広く読まれることを前提に千円で頒布もしている。詳しくは同会の溝下昌美さん（☎080・1539・5478）まで。

編集後記

先月25日の坂本町で見つかった恐竜化石の発見のニュースは、県内外を驚かせた(3頁)。日奈久から深水・宮地にかけての層には、白亜紀・ジュラ紀の層が含まれているということとは以前から報告があったらしいが、最近はコンクリートで覆われてしまい、直接地層を観察出来なくなっているらしい。環境カウンセラーのつる祥子さんによれば、「荒瀬ダムから元東高坂本分校あたりの短い範囲に太古の地層があるので、露頭があるとてもいい学習コースになるのだが」と語っている。★観光資源といえれば人物遺産も、その資源の一つになり得るのではないかと問いかけが人吉市であった。「偉人に学ぶ」シンポジウムがそれで(6頁)、今後の大きな展開に期待したい。★今月は民俗学関係の論者が多く集まった。小山勝清の遺作は(35頁) 前山光則さんの解説(40頁)と併せて読んでいただければと思う。森明香さんの五木村に関するもの(46頁)、昭和16年に書かれた大藤時彦の「エンブリー著『須恵村』を紹介す」(76頁) など、やや難解なところもあるが、地元のことでもあるので、ぜひ一読願いたい。(ま)

〒868-0015

熊本県人吉市下城本町1436-4の3号
人吉中央出版社「くまがわ春秋」編集部

info@hiyoshi.co.jp

電話・ファックス 0966-23-3759

インフォメーション

【開催中】

- ▽「人吉球磨は、ひなまつり」(3月24日、郡市一帯)
- ▽「ひなぐ雛祭り」(3月3日、日奈久温泉街一帯)
- ▽必勝「合格祈願ノ旅」(3月5日、球磨村一勝地地区)
- 2月16日(土)
 - ▽第23回人吉ふれあい100円商店街(人吉市中心市街地)
 - ▽第15回ひとよし温泉春風マラソン開会式(人吉一中体育館)
- 2月17日(日)
 - ▽第16回ひとよし温泉春風マラソン(メイン会場：ふるさと歴史の広場)
- 2月23日(土)
 - ▽2018年 多喜二百合子に学ぶ語る「早春文化の集い」(中小企業大学校人吉校)
- ▽あびす植木市(3月3日、多良木町あびす広場)
- ▽田舎の体験交流館さんがつら「寄せ植え作り講習会」(球磨村さんがつら)
- 2月24日(日)
 - ▽第45回人吉梅まつり(人吉市大畑梅園)
 - ▽あさぎり町芸術祭ステージ発表(須恵文化ホール)
 - ▽一勝地温泉かわせみ「感謝祭」(球磨村かわせみ)
- 3月5日(火)
 - ▽八代市立博物館・図書館共催特別講座「八代の名物は肥後の名物！」(八代市立図書館大集会室)



たけだ眼科クリニック

院長 竹田 憲司

人吉市南泉田町39 ☎23-3096

めがね・コンタクトレンズの

アイウェア

(たけだ眼科ビル内) ☎0966-23-3097

デイサービスセンター

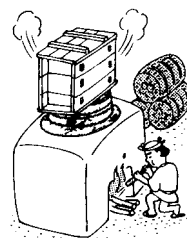
ケアプラン作成所いずみ
(居宅介護支援事業所)

いずみ

協力医療機関 たけだ眼科クリニック

人吉市南泉田町70番地の3 ☎0966-28-3307

匠の技



◆納豆みそ
(お徳用)
300円 (税抜)



御膳醤油



(だし入り万能しょうゆ)
・玉子かけご飯
・豆腐
・お刺身に
300ml 650円 (税抜)



◆みそ煎餅
477円 (税抜)

人吉散策コース 九州和食 蔵めくら
みそ・しょうゆ蔵



釜田醸造所
会長 釜田 元嘉
社長 釜田 嘉頭

〒868-0001 熊本県人吉市鍛冶屋町16
電話 (0966) 22-3164
FAX (0966) 22-3165
メール info@marukama.co.jp